

## 第七話 贖贄庭園

井本元義



前 Sの現実

「一」

七十歳代も後半になると、友人や知り合いの訃報に触れることが多くなる。著名人の死亡記事も特に目に付き、自分の死ぬ時のことを誰でも考える。そして振り返ってみて自分の人生はこんなものだったのか、これで消えて行くのか、とがっかりする。仮に満足した人生を送ったと思っても、死を身近に感じると、ただ消えて行くという、そのあつけなさに愕然とする。

その時、自分の人生には他の道があったかもしれない、もつと有義な道があったかもしれない、もつといい恋が、もつと激しいロマンに満ちた生き方があったかもしれない、などと思うはずだが、なぜかもうその考えは忘れてしまっている。まだやりたいことがあるとか、まだ死にたくないとか虚しい希望を抱くが、それが儚い希であり意味がないことがわかっている。その思いに固執はしない。

若い頃に宣っていた、自分の死を想像し、それから振り返って人生を考える、どうやって生きていくか考えるべきだ、すべての哲学や芸術はその主張のために意味がある、云々、ということはあるがだからと言って今はどうなるものでもない。どちらにせよ、たいしたことのない一生だった。

今は毎日が確実な死に向かっている。現実があっけない。無駄な抵抗はせずにただ待つだけだ。

楽しい人生だったと思うが、波乱万丈であつても平凡な静かな日々であつても、その人生を経験した本人にとつてみれば過ぎ去った日々は楽しいけれどいまさら感動するものでもないし、燃えた紙切れが僅かの灰を残して消えるように、すぐに忘れ去られる。

過去を懐かしむのは、ただの慰めであり遊びであり暇つぶしではない。それに意味を持たせようなどと考えてもまさに意味はない。今更後悔も反省もないし、子孫への言い伝えになつても何にもならない。

少年時代は、戦争を知らない者たちにも、死は恐怖であり絶望であつたが、まだ直接に皮膚にふれる物ではなかつた。

身近な年寄りの死を知つてもああそうか、と思うだけだつた。私の場合、お前の父親はお前が一歳の時に亡くなつたのだ、と言われてもそれは一つの物語に過ぎなかつた。なにも考えることもなく、毎日が食欲と目覚めてくる性欲にうなされた泥と汗との日々だつた。柔道に明け暮れ、夜は薄暗い電灯の下で詩や小説を読んだ。見たものや、口に入れた食物はすべてが体に吸収されてそのまま身になつた。将来は確実に来るし不安などもなかつた。今思うとそれらは人生の幕開けに相応しい新鮮な日々だつた。

一九六十年頃、青春といわれる時代、机を並べていた学友が海水浴で溺死したのが身近な死だつた。隣の机が虚しく空いていた。安保条約改定反対のデモで女子学生が警官隊との衝突で死んだのもショックだつた。

それからは、この歳になるまで、多くの知人や仕事人や親戚たちの死に触れた。それらは特に愛するものの死ではなかつただけに、日常のことというところでもあり記憶の中で薄れていった。ただその時、深く愛している人を失っていたら、考えも感受性も少しは変わっていたかもしれない。

しかしこの度あるきっかけで、友人たちを思い出すことになつた。すると学生時代に同じく文学や絵画、芸術を志した友人たち、あれから六十年経つた今、数えてみると親しい仲間たち十五名のうち他界しているのが十二名いるのに改めて気付いた。

私の学生時代は太平洋戦争の敗戦からまだ二十年足らずで、それでも日本は将来へ向けて高度経済成長で変貌を遂げようとしている時代だつた。そして大きな課題も前途に広がっていた。その象徴は福岡県大牟田市の三井三池炭鉱の炭塵爆発による一大事故だつた。四五八人が死に、救出された人たちも多くが後遺症に悩まされていた。

青年たちは華やかな前途に身を投じて飛躍しようとするもの、体制を正義のために正そうと革命を目指すもの、そして不安に怯えて自分の中へ閉じこもるもの、平凡な明るい人生を目指すもの、様々だつた。

それらとは別に、芸術の美はすべてを包括すると、嘯いていた文学仲間の中に私はいた。大学の校庭の隅に長屋のような小屋があり小さな部屋が五、六室あった。文芸部、演劇部、美術部や音楽鑑賞会など、クラブが違ってもお互いは友人だった。

演劇部は市内のホールを借りて古典劇を発表し、文芸部は同人雑誌発行のほか競争して創作劇を発表した。美術部はその頃から全国の注目を浴び始めた九州派という前衛美術集団の集いに押しかけて議論を吹っ掛けたりした。私はそれに就いていった。

大勢で海のキャンプにでかけ、一晚中酒を飲んで騒いだことも思い出す。田舎から出てきたMは親の作った密造の葡萄酒を浴びるほど飲んで暗い海へ向かってゲロを吐きながら、アフロデティ、と繰り返して叫んで呼びかけては自作の詩を朗読した。しかし彼は夏休みが終わっても学校へ戻ってこなかった。故郷の海に身を投げて死んだということだった。

Tの父親は市役所の役人だったが、長い間結核で入院していた。Tは麻雀屋のアルバイトで生活費と学費を稼いでいたが、ある朝、仕事場でガス管をくわえて死んでいた。疲れたと言っていた。家に母親と妹が待っていた。

演劇部のKは、彼のネクタイで脚を縛って海へ身を投げた女性の後を追って自分も身を投げた。悔悟に耐えられなかったのだ。

Hは私に明日にでも会おうというような遺書を書いて自宅

で死んでいた。睡眠薬で安らかだった。パリにでも行きたいな、退屈だ、と言っていた。

それから、三十歳代から六十代でほとんどの友人を失った。長身で好男子の演劇部のWは学生時代は派手な演技で注目を集めていたが上京してからは力を失っていた。噂では覚醒剤中毒で亡くなったということだった。

文才の豊かなYはしばらく東京で過ごしたあと帰郷したダンディだったがアルコール過多で心臓麻痺を起こして死んだ。難解な詩を書くRは酷い交通事故でも復活したが、その後は思考力が止まったままだった。

三十歳代以降は自殺者は少なかったが、様々な癌の友人たちは苦しんで死んだ。

誰もが自分の才能に不安を抱えたまま、それを信じようとして自信に満ちた生き方をしなければならなかった。美しく力強い表現を求めて焦燥した。異性への憧憬と性欲の噴出が味方だった。しかし誰もが奇怪な泥の激流の世界に一人で立ち向かわねばならなかった。そして決して勝てないことを内心は知っていた。

親しい懐かしい友人たちだった。その死を悼んだが涙は流れなかった。私はそれを自分の青春の美しい紋章として心に残していた。

長い年月で十五名の友人のうちに私を入れて三人だけが生き残っている。一人は小役人を引退して田舎に引きこもり、最後の一人は、文才のある競争相手の革命家詩人だったが、

私が誤解を与えてしまつて疎遠になりもう五年ほど経つ。今は私には文学仲間ともいうべき友人は一人もいない。

私がこの手記を書こうと思ひ立つたのは、Sという先輩の事を思い出したからである。いやあることで、いきなり思ひ出されたというべきだ。そしてこの手記を書こうと思つた時、最後の人、という題が浮かんで来た。何故か私にはわかない。

S先輩にはもう四十年以上も会つていなかった。生きていくかどうかからなかつた。最後の人というだけだ。

S先輩は私の学生時代はもう卒業してしたが、かつては私が所属している文芸部の中心人物だつた。仏文学が専門で、勉強以外では演劇部とは別に創作劇を発表したりして注目を浴びていた。私は十六、七歳の頃から二十年も、後輩というより弟子のように彼のあとを追ひ、教養を受けることが多かつた。五歳ほど年上なので先生ともいえ、友人とも言えなかつた。

社会人になつても私は彼の後を追つていた。人生の先輩としても文学の先輩としても尊敬していた。私は弟分として彼に纏わりついていたともいえる。私を迎える先輩の優しい微笑はいつも私に安心感を与えてくれた。それまで年上の人間に優しく迎えられる経験があまりなかつた。

S先輩の風貌は眼を閉じなくてもすぐに浮かんでくる。信

頼できる年上の男の傍にいる安心感も蘇る。長い髪を無作法に伸ばした黒縁の眼鏡で痩せて長身だつた。ちよつと右肩を落としたような歩き方だつた。背中に薄暗い哀しみの影を背負いながら、それを振り払おうとするのではなく宿命として抱き続ける、私はそれを彼の内に秘めたロマンと感じていたのだ。

ある時眼鏡をはずした目を見た事がある。絵で見る公家のような優しい細い眼だつた。いつも感じる威厳はなかつた。それを言おうかとも思つたが、気分を害して怒るだろうと思つて言えなかつた。

片時も両切りのピースを口から離さなかつた。私は安い煙草の吐き気を我慢しながら吸つていて、後に喫煙をやめたが彼のピースの甘い香りは今でも心地よく匂つてくる。

しかしS先輩とはある時連絡が突然取れなくなつたのだ。不可解なことだつた。いまから四十年ほど前だろうか、私が三十五、六歳の頃だつた。突然のことだつたので、私は何か嫌われることをしたか、軽蔑されているのか、と思ひ悩んだのだつた。

そういえば付き合つていた二十年を振り返つて見ると、時折見せる空虚な笑いや、苦悩を通り越した静かな空白とでも言おうか、若干の痴呆状態、力を失くした悲しみ、そんな瞬間を目にしたものだつた。そして短いが怒りが瞬間に爆発して消える。私は彼を恐れながらそれがまた尊敬の念に通じるのを自覚していた。そんな不思議な人だつた。

彼を探そうと思えば、手立てはいくつもあるのだが、なぜか私はそうしなかった。深い理由があるのだろうか。私は尊敬の念も持って無理な動きをせずそのままにしていた。自然に眼前が開けることがありそうでもあった。

その記憶も時間と共に薄れていつていつの間にか四十年経った。ずいぶん長い時間が経つてからも、多分もう亡くなっているだろうと思いつながらその時間を過ごしてきた。そして私の生活、中年から老後への移り変わりの中で次第に忘れていた。

S先輩を思い出し、過去の友人を思い出し、今の自分の老人生活を感じたのは次のことが発端だった。

「以後、この手記ではS先輩ではなくSとして記す。」

## 「二」

会計士事務所が差出人である小包を受け取ったのは、晩春の生暖かい風が窓から吹き込んでくる夕方の事だった。懐かしい少年の頃の生臭い汗の匂いが喚起される風である。年寄りにとっては憂鬱な甘酸っぱい哀しみの一瞬でもある。もう私はどこにも行かない。こうやってしみじみと風の匂いを嗅ぐ。

毎朝の一時間ほどの散歩以外はほとんど外へは出ない。一日中部屋に籠って読書や書き物で時間を潰す。地方雑誌に寄稿するだけだがそれが生きるよりどころになつてしまつたよ

うだ。それでも仕事をやめたばかりの頃は朝の目覚めが楽しかった。したい事やするべきことが沢山あるが、責任のない仕事だからこそまた楽しかった。だが次第にそれも少なくなるとなることも多い。それだけに小包は珍しく、嬉しかった。

小包の差出人会計士は、自分はS家の財産管理人で、S氏の依頼で送ると書いている。私は驚きと懐かしさと喜びと悲しみの混じった奇妙な感じを同時に受けた。多分今は存命ではないだろうから、いやしかしい最近まで生きていたのだろうと思うと、何か不吉なことも考えたが、それはすぐに楽しみに変わった。今の私にはちよいどいい刺激になるだろう。小包を開ける前に、一度に多くの思い出が、一つ一つが鮮明なまま眼前に蘇った。かつての友人たちの死に方や順番まで正確に思い出してしばらくそれに酔った。そしてSの小包の中身が、なるべく奇妙な怖しいものであるのを期待する自分を私は他人事のように見ていた。

小包には古い型のフロップीडイスク、CD、USBが数個と古くなって黄ばんだノートが数冊詰め込まれ、簡単な弁護士の手紙が同封されていた。Sの遺産の整理中に、貴殿宛に送るようにと記された段ボール箱があつたので送る、というものだった。彼の死が自死であつたのかと一瞬思ったが、病気などで死期を悟つた状況で書かれたものかもしれない。私にはどちらでも同じだという気がした。

会計士事務所は隣のO県で、確かにSの故郷には間違いな

い。私的なことはなぜか話しながらなかったSだったが、そこが故郷だということだけは私も知っていた。

四十年前に連絡を絶つてから、彼は私の隣県に住んでいたのだ。また最近までそこで生きて生活していたと思ひ、ずっと私の事を気にかけていたのかと思うと嬉しく懐かしい不思議な気もしたが悔やむ気持ちちはもう失せていた。

ノートやメモリーを全部読む気はない。連絡を絶つてからすぐに書き始め、おそらく四十年間書き続けたものだろう。姿を突然消したことの不可解さは、その理由を知るのは楽しみだが、当時の驚きと悲しみと不安を思い出しても、今はその時の自分を思い出して懐かしいだけだ。しかし尊敬する先輩の生きてきた印を辿るとしても拾い読みするしかない。メモリーに至っては相当の枚数になるだろう。仕事をやめてすぐの頃、まだ私がものを必死に書いて、それに生きがいを求めていた頃だったら、何かのインスピレーションを得ようと真剣に読んだかもしれない。今はその意欲はない。それでもノートの最初とメモリーの一番古いもの、そして一番最近のノートをまず読むことにした。

高校の二年上の友人Yが大学に入って、文芸部の雑誌で作品を出すよ、と言ってきた。彼とはお互いに作品を見せあう、高校の文芸部に所属していた友人だった。私は物珍しさに、自分の三十枚ほどの短編を持ってその友人Yを大学に尋ねた。その時の出立を思うと懐かしい。丸坊主に学生帽を被り黒の

制服、そして下駄履きだった。市内電車ではぼ一時間かかった。

文芸部室には三人が机を挟んで煙草を吸いながら座って何か話している。窓ガラスは埃まみれで外が見えない。板壁は詩や訳の分からない文句が墨で書かれて黒く汚れている。ませたガキが来たな、とでもいう風に珍しがられて私は迎えられた。私は嬉しく、覚えたての煙草を無理して吸おうと、一本ください、僕の小説を読んでくたさい、とやつのことと言った。

それから時々尋ねるのが楽しみになった。君はこの大学に入りたいのかね、と聞かれても私はいいえと答えて、僕の小説はどうですかと聞き返し不遜な態度を見せてはまた面白がられた。うまく書けるな、君には才能があるよという言葉を買ったりすると有頂天になった。辺りを気にせず煙草を吸えるのも嬉しかった。正門前の喫茶店へ連れて行ってもらうのも楽しみだった。電車賃と初めて飲んだ珈琲代はその頃の私には高いものだった。

離れた場所にある本学の文芸部との交流もあり、そこへも私は連れられて厚かましく足を踏み入れた。Sに会ったのはそれがはじめてだった。机と椅子を隅に片付けた教室で、五人ほどが芝居の稽古をやっていた。Sは監督だった。真剣な表情と台詞の内容は分からなかったが、その場にいる自分が嬉しかった。稽古が終わり椅子や机を並べるのを私は手伝った。終わるとSが私に声をかけた。君の作品を読んだよ、な

かなかないね、という一言が最初だった。私は練習の後の彼らの珈琲タイムにもついていった。Sは私の珈琲代を出してくれた。

そのサルトル作の「墓場なき死者」という芝居はそれから何度かの稽古を経て市内の公民館で上演された。私は舞台の設営を手伝ったり雑用を引き受けたりした。内容は良く分らなかったが、死や裏切りや闘争や悲しみや絶望の表現が印象に残った。私はSに使われることで今までにない世界に触れることができた。

実存主義とは何ですか、と聞いたこともある。その時は少年向きにと優しく教えてくれたのだろうが内容は今は覚えていない。「どうしようもないことは、どうしようもないのだよ」そんな一言もあつた気がする。

「人生に絶望することなくして、生を愛することはできない」というカミュの一文があると言われた時は、さらに分かんなくなつた。

公演は成功で新聞にも取り上げられ、Sは「創作座」という文芸部とも演劇部とも別のグループを作つた。次はSの自作の芝居の上演だつた。医学部の講堂を借りての公演だつたように思う。私はまた手伝つたが、その芝居のタイトルはもう覚えていない。主人公が望んではいけないのにピストルで自殺しなければならぬ状況に追いつめられる、そんな芝居だつた。どうして彼は死ぬんですか、とSに聞くと、それがこの主題だよという答えを貰つただけだつた。その後はもう聞

けなかつた。

それから私は大学受験で勉強が忙しくなり大学には遊びに行けなくなつたが、結局その大学を受験した。試験が終わつた日にSの下宿へさつそく報告へ行つた。そこは文芸部仲間が集まつた学生街で、酒を飲み議論を交わし作品を発表し合う、活気ある界限だつた。ある時Sが言ったことがある。パリにはカルチェ・ラタンという界限があつてな、いろんな若者の物書きたちが集まつて、書いたり議論したり、遊んだりしている、こは九州のカルチェ・ラタンだと俺は、名づけた、似ているのだよ。

受験の成績の手応えはあつたので、私の気持ちは踊つていた。試験はどうだつた、今日は英語でした、何点だつたかな、八十五点くらいでしょうか、え、そんなに悪いのか、短い会話だつた。私は次の言葉がなかつた。

私の入学の春にSは東京の本屋紀伊国屋に就職して上京した。

私は理科系の学部に入學したが、クラブでは文芸部に所属し小説を書き雑誌に発表した。学内での良い評判も受け、また大手の商業文芸誌に評価されたりして意欲に燃える日々を送つた。ひよつとして本物の作家になるか、と少しの自信と不安を抱えながらも書き続けた。作品をSに送ることは忘れなかつた。送ってくる小さな字でぎつしりと書かれた感想や批評を私は何度も読み返した。

大学の四年間は前述のように何人もの友人を失い、他人との接触で屈辱も侮蔑も怒りも悲しみも経験し、そしていくつかの恋も失った。私は卒業と上京が待ち遠しかった。

一度上京してSを訪ねたことがある。初めての夜汽車で初めての東京だった。就職試験のためで時間の余裕はなかったが、新宿の紀伊国屋の事務所を訪問した。詳しい地図と目印を送ってもらい、何度も練り返し確認して、群衆に揉まれながら迷子にならないように、都電を乗りかえ地下道を歩き目印を探して本屋紀伊国屋の二階の受付にたどり着くまでは夢中だった。檸檬という喫茶店だったろうか、そこで待たされてSが現れた時は何も変わらないその姿が懐かしく、目の前の世界が急に開けていく気がして私は興奮していた。

洋書の輸入と紹介と、新しい文学の情報を日本へ発信することが仕事だということだった。私もその頃は国内外の現代文学を読み知識もある程度は持っていたので、彼の話について行けることが嬉しかった。Sの口から出る西洋の文学者の名前に戸惑うことなく私も反応した。

それまで喫茶店で洒落た紅茶など飲んだこともない田舎者だった。Sは砂糖を入れてゆつくり紅茶を混ぜながら、表面にミルクを浮かせるように静かに注いだ。紅茶はこうやって飲むのもいいものだよ、そんな言葉にさえ私は感動していた。その後のご馳走になった昼飯のスパゲッティナポリタンの味も忘れられない。

必ず東京で就職して仕事をしながら、また物書きとして生

きがいのある人生に取り組もうと決心したのは自然だった。新しい光が前途に輝いていた。

「三」

その後上京してからの四年間は私にとつては、本当の人生の始まりだった。青春時代の甘い酒や苦い涙は忘れ去られた。眼前の岩盤を切り崩しながら僅かでも先へ進まねばならない日々だった。

勤め先の出来たばかりの丸の内の九階建てのビルは輝いていた。都庁や三菱銀行の煉瓦の本社が傍に建っていた。科学分析器械の製造会社で国内外に販路を広げているまだ創立二十年の新進の注目された会社だった。私は営業部に所属した。客先は大学や大手企業や官公庁の科学研究者たちで、機器の説明や売り込みだけでなく合間の会話も意味深く面白いものだった。

また積極的に海外での展開を目指していた。会社が新しいだけ新人にも目の前のいろんな仕事が開け、上司も先輩も仕事に誇りを持ち後輩に優しく付き合ってくれた。私は原宿に小さな部屋を借りた。朝は眠たく満員電車は辛かったが、会社へ行くのは楽しみだった。先輩たちとの仕事も遊びも楽しげばかりだった。

学生時代に、商業文芸誌「新潮」の編集者から、同人雑誌の作品を褒められ一度会いたいという手紙を貰ったことがあ



った。東京生活に慣れると私は早速会いに行つた。書いたら持つて来なさい、いいのがあれば売れるよ、という言葉に私は有頂天になつた。

一度食事でもしようと誘われて、私はSも連れて行つた。それから彼は、海外文学の動向などの情報を時々「新潮」に書いたりしていた。

私は自分の才能に不安を覚えながらも、いくつか書いては編集者に見せた。批評は厳しかったが、その後は食事や酒に誘つてくれた。連れて行つてもらつた文壇バーで著名な作家と知り合つて勇気を貰つたりした。

そんな一、二年が経つと、仕事にも責任が出てくる。小説ももつと必死に取り組まねばならないと、両方に真剣みが増してくる日々になっていく。楽しいばかりの時間は過ぎていた。週日は忙しい仕事に没頭して、金曜日の夜は町に出て酒を浴びる。土曜日と日曜日は部屋に閉じ籠つて創作を続ける。誰とも一言も交わさない。自信と不安が交差する日々だった。苦しかったが充実していた。

編集者の評価で没になつた作品を私はSには見せなかつた。彼も催促はしなかつた。私が苦しんでいるのを知つていたのだろうか。

時々、喫茶店で二人で時間を過ごすことが私の楽しみだった。酒は仕事上で好きだったが、Sとの酒は必要なかつた。変わった店があつたよ、と電話をかけてくれると私はすぐに飛んでいった。大抵がクラシックやジャズの店だった。

私が洒落たシャンソエなど見つけるとついてきてくれた。

話すことは国内外の著名な作家の近況や噂話などで難しい文学論ではなかつた。Sの専門のフランス文学の、私も親しんでいた十九世紀の詩人たち、世紀末から二十世紀初頭の文学者、大戦を経て台頭してきた新しい文学者たち、名前を聞くだけでも私の胸は躍つた。ランボーとヴェルレーヌやマラルメ、ボードレールやユーゴー、ジツドやヴァレリー、ピカソやアポリネール、サルトルやカミュ、彼等のお互いに影響し合う関係や、歴史の流れを分かりやすい言葉で聞くと胸がむずむずして私も一端の物書きになつた気がした。喜びは心に染みて溢れるばかりだった。

詩人のポール・ヴァレリー研究がSの卒論だということだった。彼は地中海に面した小さな港町に生まれた。背中に地中海の太陽を感じ続け、眼前の海の青に生と死の葛藤を見ている。長い哲学思考と精神の危機の末に実存を説く難解な詩を書いている。彼に影響を与えたのがマラルメだ。私には理解し難かつた。

マラルメの「あらゆる花束の中に存在しない花 観念そのものである花 それは非在の花」という言葉がフランス文学の根源だという彼の言葉も良く分からなかつた。

彼は私に自分の憧れなどを口に出しては言わなかつた。年下の私に打ち明けるものではなかつた。何時かマラルメとヴァレリーの全作品を翻訳してみたいとも言つていた。私には追いつけない話だった。

Sは学生の頃一年ほどパリ大学に留学していた。その頃のことを少しづつ話す様子を見て、私も行った気がして懐かしんだ。自分の作品の本を持って地下鉄に乗る自分や、カフェに座って新聞を読んでいる姿が容易に想像できた。初夏の光を浴びたマロニエや、枯葉が私に周りに降っていた。

私はその時に彼の口の上った、読んだことのない作品はすぐに買い求め、次の機会に感想を述べた。それが私の次の作品のエキスになったりした。

Sの棲家には行ったことはなかった。私は自分の生い立ちや家族の事を話したがSは自分のことは話さなかった。私は私的なSを知りたかったが、無言のうちに拒否されていた。

Sはそれから紀伊国屋を辞め、ある出版社に勤めたあと独立した。

「ラ・メゾン・ウエヌス」という彼の会社は本郷のアパートの一室にあった。男子社員が二人、女子社員が一人、本の溢れる棚に囲まれて仕事をしている。私が訪ねていくと、社長の友人の物書きということで丁寧に対応された。それから私は外回りの仕事の合間にしばしば顔を出すようになった。昼食時に御馳走になるのも嬉しかった。

Sの仕事は順調だった。数年の間に中堅の名の通った出版社になった。自費出版も引き受けていた。また秘かに隠されていた市場を開拓した先駆けだった。幻想文学、暗黒文学という風な、眠っていた市場を発掘していった。キリスト教の

神秘、呪詛と変容、占星術、悪魔学入門から浪漫主義の世界観、ボードレールと世紀末、それらの本が事務所には積み上げられ町の本屋に出荷された。ウダツの上がらない大学の先生は趣味を思い切り上梓出来る嬉しさで安い稿料で仕事を引き受けた。

国内文学ではあまり日の当たることのなかった過去の文学者を取り上げては出版しその隠れた才能に光を当てた。Sのおかげで埋もれた美しい感覚が蘇った。

S自身も何冊も出版した。私は彼の本はむさぼり読んだ。評論の「本の透視図」「近代の狭間に生きた文学者」や三十年代のあまり知られていない、アナイス・ニンの「近親相姦の家」や「O嬢の物語」「イマージュ」「娘たちの学校」などの翻訳本は文庫本にもなった。

隠れた女性たちの才能の息吹を先取りしようとしていたのだらうか、女性専用の文芸誌「パンドラの函」を発行したり、「文学季刊」という雑誌は新人の登用を進めていた。私も「新潮」を没になった作品を掲載してもらった。Sは褒めてくれなかった。私は詳しく聞く勇気がなかった。

そのうちに社員は十名ほどになり、事務所も広くなっていた。

やつと私の作品が「新潮新人賞」の佳作を貰って掲載された時はもう三年経っていた。著名な評論家の選者が褒めてくれた。私は嬉しかったがそれ以上に不安に陥っている自分を

知っていた。自信のない自分を励まそうと、受賞の通知を壁に貼りつけて毎日見ることにした。Sは喜んでくれたが、作品についての称賛はなかった。

丁度その時、勤めている会社の海外事業部から転属の打診があった。数年後はどこかへ派遣される。私が希望していたことでもあった。ただその頃の事業部は昼夜が逆転してかなり忙しそうだった。私はまた次の機会があるだろうと思つてそれを断つた。ものを書く出発のせつかくのチャンスを手放すわけにはいかなかった。

だがその後の作品の評価は芳しくなかった。いくつも没になつた。もう物書きになるのは諦めるか、と気分が沈んでいく日々だった。Sさんが出版している本を全部読んだら、小説がうまく書けますか、など冗談交じりに彼に聞いたこともある。彼は真面目な顔で、それは無理だ、と答えた。自分で切り開け、と言つていたのかもしれないが私はよりどころを失つていた。

S著の「近代の狭間に生きた文学者たち」は私の好きな本だった。薄命の詩人、革命家、作家、彼等の生きていた時間や場所を辿り、その生活や感情や死に様等を取材と想像で書いたものだった。誰にでもSの優しい眼が向けられている。

無名や夭折という彼らの生涯はまだ究められていない謎をいくつも残している。その謎を解くために彼は様々な土地に足を運び、様々な人にあつた、とあとがきに書いている。エッセイ風文学論と言える四百ページを越える大著である。

明治末から大正初期に生きた詩人三富朽葉は、海外の詩人を紹介した上田敏と同じ頃の日本の象徴詩人の先駆者だったが、二十七才で銚子の海岸で溺死した。日本独自の透明な美しい詩を残している。別れた妻への哀惜を抱いたままだつた。日本文学史でもあまり注目されていない詩人だったが、Sが発掘し全集も編んだ。

山川登美子は与謝野晶子と鉄幹の愛を争つて悲恋の女として影の存在から抜け出せないまま三十歳を前にして死んだ。不幸な生涯だったが、歌への情念は美しい死への諦観になつて非在の花と言われる。三人で散策した永観堂の紅葉狩りの思い出は、彼女の死の床に散り始めた桜になつて昏い闇に浮かんだ遺歌となつた。彼女が最期を迎えた丹後半島の小さな町をSは訪れ哀惜を述べている。

病魔と孤独を纏う梶井基次郎の心理は、デカダンと悪へ傾斜していきながら俗悪なものを厭い、美しい作品をなぜか残すことができた。伊豆の湯ヶ島で友人たちと遊びながら、ふざけた調子で笑いを誘いながら、彼は宇野千代への叶えられぬ恋心を抑えていた。「闇の絵巻」では闇の絶望への情熱を語り、そこに仄かな明かりを見る。その頃の東京都内の、武蔵野の面影が残る丘陵や丘を光と影の鳥観図としてみて大きな闇を時代に映している。

また、大逆事件で死刑になつた菅野須賀子の健気な生き方に好感を持つて描き、荒畑寒村との恋の愛憎や、幸徳秋水と

の出会いや椿や木槿の花が散る墓を紹介している。彼女の燃え尽きた情熱と受難にSは「蒼穹の風」と題した。

この本には他に私の知らない詩人も数人いたが、特に私の興味を引いたのは詩人ではなく、一人の若い運転手の物語であつた。

彼は栃木県の貧農の出で東京へ出ると車の免許をとりK子爵家の運転手の職を得た。朴訥で気真面な男で運転手の制服は彼の自慢だつた。

当主Kは中央官庁の役人だつたが日露戦争に出て戦績を上げ子爵の名譽を得た。出身地には多くの山林田畑や鉾山を所有していた。妻を亡くし子はなかつた。後添いは没落伯爵家の娘の晶子だつた。その家は他人に騙され身代を失つていた。

美人で気位も高い彼女はその頃の流れて旧来の封建的な考えから自らを解き放とうとしていた女性たちの一人だつた。意見を雑誌に投稿したりしていた。ただ生来の気の強さと移り気と他人へ手加減のない追求のため、次第に仲間から疎んじられたと気付いた時はもう婚期は過ぎていた。伯爵とはいへ逼迫した家庭の事情もあり、位は下でも一応子爵である富裕な家に嫁ぐしかなかつた。

すぐに娘が生まれたが、晶子はKの女性関係や傍若無人の振舞に侮辱を受け次第に我慢ができなくなつていった。ついに彼女は若い運転手を誘惑し娘をおいて出奔した。そして都から離れたKの出身地で情死して復讐を遂げた。運転手の遺書は抹殺された。

著者Sは運転手の故郷を訪ねた。六十年も前の出来事を知つているものはわずかだつたが、運転手の親戚などを尋ねて短い彼の命の証を辿つた。また偽りでも短い愛をかけてくれた夫人を想う情念は切ないものだつたに違いない。著者Sはその遺書を一篇の詩であると書きたかつたのだろう。

私の頭の中には、会社の業績の数字と作動する器械の動きが、夜ごとの酒に浮かんで明け方まで消えなかつた。胸を打つ美しい映像を想像する力は失せていた。酒に溺れて浮かぶ妄想の方が心地よかつた。それでも何とかしなければ、気持ちのこもつた一行でも書かねばならない、というすがりた

い気持ちはまだ少しは残つていた。自信を失つたと思われなくなかつた。ある時私はSに言った。

「あの運転手の事を、僕なりの小説にして書いていいですか。」

いつもの喫茶店だつたらうか。チェロの低い音色が響いていた。Sはピースに火をつけながら黙つていた。一口吸うと何か言い出すと思つて私は待つていた。彼は眼を閉じて煙を吐きながら何も言葉を発しなかつた。怒つていたのでらうか。私は次が言えなかつた。しばらくしてから私たちは何もなかつたようにいつものように別れた。そして次に会つた時

も彼は覚えていないかのようにして

中小企業を経営している父が時折上京してきた。社員は五十名足らずだが、中小企業といつても三支店をもつ地元では着実な会社だった。医療機関に医科器械や消耗器材を売る仕事で、客先は確実に安定した市場だった。父の話では薄利多売で同業者との競争は激しい。父と二人で話をするなどめつたにないことだった。東京で私を一人前と認めた話しぶりだった。

父と言っても養父だった。一歳で実父を亡くした私は五歳の時にまた母とも分かれ今の家に養子になった。養母は優しく二人の姉妹がいて平穏な家庭だった。ただ私は父があまり好きではなかった。吝嗇で社員や他人には厳しかった。

父は私に帰郷して会社を手伝ってくれと言った。人手が足りない、社員は長く続かない、自分も歳だ、後を任せたい、養子にしたのはこの時のためだった、と言葉に含んでいた。今すぐでなくてもよい、考えておいてくれと父は続けた。

いつかは覚悟しなければと思っていたが、悩みが始まった。なにもかもが中途半端で未練を断ち切ることはできないが、いつまでもこの状況に安住できないことも分かっていた。私は酒に溺れ、週末は深夜映画館で朝を迎えることが多くなつた。

Sに相談しても答えは分かっていた。帰った方がいいよ、そこで力を蓄えてまた挑戦すればいい、と言われるのが怖かった。

以前に父の会社を覗いたこともある。民家を改築した事務

所と広く薄暗い倉庫に積まれた見慣れない器材の間を、気力の失せたような若い社員が行き来していた。その時私はすでに予感していたのだ。

気落ちしている私を慰めようとSが居酒屋に誘ってくれたこともある。滅多にないことだが、女性事務員も連れてきて、Sは酒も飲んだ。興味を惹かれる女性ではなかったが、私はビールの早飲みをしたりして二人を笑わせた。酔うほどに胸には空疎な風が吹き抜けた。Sがいい加減な励ましをしないのが良かった。少しは安心できた。私は帰りに女性を送っていつてそのままその部屋に泊まった。どうにでもなれという気持ちで惨めだった。

それからしばらくはSに会いに行かなかつたが、久しぶりに会社に行くと、扉は閉まったままだった。表札はなく電話も通じない。女子事務員の部屋にもう行くことはないと思っていたのに、そこしかよりどころがなかった。彼女は私を待っていたようで、その話をしてくれた。

ある日の業務の初めの朝礼時に、社員全部が社長のSの前に集まった。一人が、労働組合を作ったので社長と今後の事を協議したい、まず賃金交渉をお願いしたいと言った。Sは分かった、と言ってそのまま部屋を出て行った。それから彼は何日も姿を現さなかった。週末が明け、社員が事務所に入るとそこは全くの空閑だった。書籍や事務備品がすべて片付けられていた。取引先の支払いは済んでいた。社員宛にはわずかだったが一律で渡す金銭が事務員に預けられていた。

Sの性格から見てその行動には納得がいった。私も自分のこれからのことを決めるだけだった。

そのすぐ後にSから連絡があつた時、私は湧き上がつてくる力を感じた。彼はいろいろな細かなことは言わずに、いきなり言った。急にフランスへ行きたくなつた、ついてくるか、二週間ほどだが。私はすぐに決心してその日に辞表を書いた。驚く者、心配する女子事務員、冷やかな目で見る同僚、私は何も気にしなかつた。金はあるだけもつてこい、足りなければ用意する、の言葉がまた心強かつた。

上京して初めて世間に足を踏み入れた時以上の興奮だつた。

その夢のような、また興奮した二週間をこの手記に書くこととはない。書くとするれば私にとつてはまた別の大切な手記になる。ノートルダム、エツフェル塔、ルーブル、モンマルトル、セーヌ川、下町のカフェなどを歩き回る喜び、その観光気分だけでも書きつくせない。

ただ、二、三の感じた小さな新鮮な驚きを書き残しておきたい。多くの人が街中に住んでいる事、密集した洒落たアパートマンの下は本屋であつたりカフェであつたり何かの会社もある。都会の街が普通の生活の場でもあるのが珍しかった。また地下鉄は東京に比べて汚く貧弱だが、本や新聞を読んでいる顔が、誰もがサルトルやカミュなど文学者に見えたりするのがおかしかつた。その中に溶け込んで行きたかつた。私

は車内の写真を撮ろうとして、失笑を買つた。

今日一日、君が好きないようにして過ごしてくれ、と他に用事があると言つてSが出かけた時、私はリユクサンブル公園で午後いっぱいを過ごした。サンドイツと缶ビールをフランス人と並んで買い、それを手に文庫本「罪と罰」を読んだ。三度目だつた。椅子は心地よかつた。親子連れや老人や秋の花々に囲まれて最後まで読んでも、まだ空は夕暮れ的光にはならず澄み切つていた。パリの陽は落ちるのが遅い。私は満足して部屋に戻つた。

地下鉄と公園、その空気を吸う、それだけで私はいくらでも小説が書けそうな気がした。

Sが好きだと言つていた、マラルメとヴァレリーの墓参りにもついていった。彼も初めてだつた。Sに言われて私も二人の詩を何度か読んだが難しくてよく理解できなかった。

気持ちのよい印象だけ残つた。マルセイユから乗り継いだ小さな港町の丘の上にヴァレリーの墓があつた。背後の遠くに地中海が紺碧の光を放つていた。若い女性が案内してくれてSは何か話していた。

マラルメの家は今はどうやって行つたか記憶にない。フォテンブローの森に近くのセーヌ川の支流だつたようだ。瀟洒な小さな家は川に面して、裏庭には林檎の木が沢山立つていて地面一杯に小さな林檎が落ちていた。隣に古いホテルがあつた。いつかそのホテルに泊まつて書き物をしている自分

を夢見たが、現実味が感じられて気分は良かった。

墓は近くの墓地にあった。黒い大理石が緑色に装飾された小さな気品のあるものだった。Sは真剣に見ていた。

サンジェルマン教会の横の小さな公園のわきに本屋があった。Sは何冊か買って店員に何か尋ねた。そして私に小道を挟んだ向かいのアバルトマンを指して、その二階がサルトルの棲家だよ、と言った。

教会の前の何度もSから聞かされたカフェ・ドウ・マゴで飲んだ珈琲は格別美味しくはなかったが、Sにも私にも意味のあるものだった。

教会では葬式があつていた。一般人だろうか参列者は少なかつた。

私たちは座つてそれを見ていた。教会はもう何度も見てきたが、流れていたフォーレのレクイエムの美しさに私は眼を閉じた。美しいことは、またなぜ哀しいのか、という誰かの文の一行に感動したことがあつたのを思い出す。

この曲は好きですと言つてSを見ようとしたときの驚きは言葉で言い表せない。辺りは薄暗く眼鏡の奥なので彼が目を開けているのか閉じているのかは分からなかつたが、人間の顔がこんなに変形するものだとは思えないほど、それは歪んでいた。彼は深い苦悩の淵に落ち込んでいたのだ。私は息をのんで眼をそらした。

サンドラという美しい女性は金髪の長身でSと並んでも釣り合いがとれていた。長い髪を無造作に肩まで垂らしていた。その親しそうな様子は恋人かもしれないなかつた。Sの大学時代の教授の奥さんはフランス人でその妹がサンドラだった。Sが学生の頃一年ほど日本に来ていて教室にも出入りしていたそうだ。Sの留学中も付き合いはあつたのだろう。今はパリで外国人相手の語学学校の先生をしている。明るい笑い顔は私より年下のように思われた。日本語も少しは話せた。

私をおいて出かけるSは彼女と会つていたに違いない。私は嬉しくもあつたが羨ましかつた。食事に誘われた時は私は思い切り朗らかに振舞い、彼女を笑わせた。日本人は料理を食べるのが早すぎる、という意見に中華料理屋では麵の早食いを見せた。得意のビールの早飲みを見せると、彼女はSの肩に顔を埋めて笑つた。Sも弟を見るように優しい眼で私を見て笑つていた。一度は変わった洒落たシヨールのような上着を纏つているので、それは破れた布を着ているのか、ファッションかと聞くと彼女は破れているのよ、と言つて屈託なく笑つた。

次には女友達を紹介すると言つていたが、それは叶われな  
いまま、私たちは帰国した。

#### 「四」

私の四年間は終わった。周りに挨拶もしないまま、私は逃

げるように帰郷した。しかし修行を終え自信に満ちた確たる人間として郷里に降り立たねばならなかった。

ベトナム戦争反対の運動が少し落ち着いた頃だったが、カンボジアで内戦がおこった。極左の若者たちが日航機をハイジャックして北朝鮮へ渡った。夏には大阪万国博覧会で月の石を見るために大勢が列に並んだ。十一月には三島由紀夫が割腹した。時代は不安と混乱の兆しを内包しながら、大きく変貌しようとしていた。

地方の中小企業の父の会社は、私の勤めていた東京の企業とは惨めなほど落差があった。華やかな都会の会社と違って、薄暗い事務所と安い給与に気力のない社員がいた。上昇志向があるものは転職して出て行った。

古い商店主のような経営者の父との葛藤が私の最初の仕事だった。社長の身内の私を嫌がって退社する者もいた。新しい経営に変わる過程で会社はしばらく混乱するものだ。それでも企業が成り立っているのは医療業界という安定した市場と上昇する日本経済のおかげだった。

そこから私の四十年以上にわたる苦しい仕事の日々が始まった。人材を集め教育し、事務所を新築した。組織を作り機能させた。目標を設定しその達成感を味合わせた。できる限り社員の待遇を改善し、会社の体力もつけた。

やるべきことが眼前に山積みであり、また次々に押し寄せてきた。一挙一動、言葉の一つ一つ、すべてに責任を負わね

ばならなかった。

成功の喜びもあったが、失敗の方が多かった。激しい競争と裏切りと怒りに耐える日々が多かった。気楽な熟睡の夜はなかった。酒は強くなった。後悔と諦めに耐え私は時には逃げた。

若く優秀な社員が退職するのが辛かった。大きな企業に転職したり上京したり、よりよい環境を求めて彼らは去った。説得して引き留めようとしても、内心では私は彼等の気持ちに納得がいった。生涯この中小企業の内の会社に勤める、と言えなかった。

それでも結局、私は仕事を愛し、苦難に立ち向かった。毎朝私は七時前には会社について机に座っていた。挨拶を交わし入ってくる社員の一人一人の顔を確認した。社員を叱咤激励し、ともに喜びを分かち合あった。率先して前線で働いた。成功を喜ぶために、沢山の傷や屈辱を闇に捨てた。客先にも取引先にも金融関係にも次第に信用も増していった。平凡な結婚もした。

そして企業を苦しいなりに拡大させ、社会的に責任のある地位も築いた。他の企業を買収したり提携したりして全国展開の企業にした。気が付くと四十年以上経っていた。私は表舞台から降りた。

ただこの四十年はもう何も書けなかった。頭の中は仕事のこと一杯で、文学という文字を考えると、胸には冷たい異



物が刺しこまれ、ペンを持つ手は硬直した。読書と音楽と酒だけが救いだっただけ。文学で再び上京することはなかった。

医療器材製造社は、全国の販売店を集めて東京やその工場で会議を開くことが通常だった。会社が落ち着くと私は度々会議に出席できるようになった。会議と言っても儀式の一つで、販売会社には責任もなかった。その年に二、三回の上京は私にとっては嬉しい休暇のようなものだった。

会議が終わってSを訪ねるのが私の決まった日程になった。Sは一人で出版社をしていた。相変わらず好みの本を出したり、自費出版を受けたり、会社のパンフレットを引き受けたり、小さな企業の経営相談もしていた。事務所は目黒の狭いアパートだった。もうコンピュータの時代になっていた。彼はそれを使いこなしていた。会社名は「ラ・メゾン・ウエヌ」から日本語の「美術館」となっていた。アパートのドアを開け覗き込むと、積み上がった本の間から顔を出して、おお来たか、と見せる笑顔が私の上京の一番の楽しみだった。

その仕事場の一室の床は、私の宿泊所にもなった。

相変わらず喫茶店などで過ごす時間が多かった。時には目黒の名所の旧朝香宮邸の「庭園美術館」を散歩した。歴史のある行人坂や目黒川沿いの散歩も好きなコースだった。私が時に仕事の愚痴をこぼしても、黙って聞いてくれて時には鋭い質問を返し、それがまた私の参考になった。

彼はその時書いている評論や小説家の話をしてくれた。その話は会う度に次の私の新しい知識に広がっていた。海外文学だけではなくその頃は能など日本古典文化に詳しくなり、話は尽きなかった。

かなり長い時間をかけて書いているというのは、泉鏡花論だった。各作品に現れる種々の花をよく知ることが、その作品を深く読むには必要だ、作品の深みが増す、と言われ私はまだ読んだことはなかったのを恥じた。題は「泉鏡花と花」というかなり長いものになると彼は付け加えた。Sは述べる。

何故、人間はわずかな花の断片をもとに幻を求め、花が実在するのを期待しながら幻へ遡上するのか……

……  
また藤原定家の「花も紅葉もなかりけり……」というのは花の不在を凝視することによって、この世に並列して存在する死や花や虚無の世界を読者に暗示している。そのうえで死の風景の背後からくつきりと幻の花が浮かぶことである。言葉によって虚しい世界を潜り抜け歌の構造、作者の意図が花の不在の歌の中に虚の花を咲き誇らせている。

……  
もつとも鏡花に近い近代詩人ステファン・マラルメは……と続き

「私は花という時、私の声ははつきりした輪郭を後に残さず、すぐに忘れられてしまう。が同時に我々の知っている花とは

違つた、現実のどんな花束にもない、匂やかな、花の觀念そのものが、言葉の持つ音楽の働きによつてたちのぼる」(南条彰弘訳)

花の不在を凝視することは知と感覚とによつて空洞の世界を作者が巡礼する行為と重なつてゐる。・・・虚しい現実は言葉や絵や音によつてあらゆる花、花束の中に存在しない花を浮かび上がらせることができる。マラルメは「虚像」「わが觀念の花」「純粹觀念」と呼ぶ。

表象としての花々は、自らを解き放つて、新たな形象や価値を獲得し、整然と幾千の美として花開きながら、生の虚しい深淵に橋渡しをする。純粹な思考の中で転移が行われその秘儀のさなか、虚に等しい形象が目覚め、最後に「非在の花」が出現する。

Sの前書きである。

「鏡花が最も愛したのはあぢさいであつた。その花は終焉の住居となつた番町の家の一坪足らずの小庭の埋め込みにも咲いており、これを愛することが日課であつた」没後出された全集の一文である。

「紫陽花は早世した母親像ではなく、もつと複雑な屈折を持つた別のものである。母不在の空洞、滲みだす悲しみや虚脱感が、与えられ満たされることのないまま、七色の光で照射し、幻影を映し出す母の美化であつた・・・」Sは語り続ける。

「時に幻の青い花を想い起させ、人の心の翳に吸い込んでしまい、いつまでも咲き続けて、潔く散華しない紫陽花の花。自ら造花を目指した花とさえ思わせる・・・」

そして、その花は、「高野聖」の淫靡な物語へ誘つていく。

また薄紫の紫陽花と共に愛したのは藤だつた。「女仙前記」は傑作とは言われていないが、Sの好きな作品の一つだつた。

藤は万葉集にも多く詠まれ、また平安は藤の文化とも言われた。藤壺が、紫式部が、また冠位の最高は紫の藤色である。しかし実際には自由奔放な恋愛、肉感的な意味合いを連想させる。すがりつき、まといつく鳶、しなだれ、揺れ、舌状花の不思議な形、甘美にむせ返る香り、どれもセンシユアルな連想を誘う。

しかし鏡花の藤は、叶わぬ恋を思つて、焦がれ死んだ娘が紫色の幻想になつて、仙境に蘇る。「撫で肩の背後に黒髪を颯と流したが、紫の襟を深く合わせ、黄昏に見る藤の花を、さながら単の衣、同一色のやや薄い無地の扱き帯を無造作に纏うた・・・」と鏡花は書いてゐる。

今は車夫に落ちぶれた若者との叶わぬ恋に陥つたある令夫人が仙境へ憧れ出て幻想の娘と重なる。黄昏時に咲く夢のような幻、消えなればかりに浮き出た幻だつた。

そのほかは、躑躅、朝顔、橘、桜、黒百合、白菊、罌粟、

菜の花、桔梗、杜若、椿などが各作品と共に語られ、二枚置かれた鏡の間の花々が永久の迷路へ続くように読者を夢幻の虚無へ導いていく。

また嬉しかったのは、かつて出版していた本が古本屋で相当高く評価されているということだった。とくに三富朽葉全集はかなり高かった。

仕事にも余裕が出てきたそれからの五、六年は私にとつては有意義なSとの思い出深い日々になった。文学者のゆかりの地方に出かけて宿泊するようにもなった。費用はほとんど私が出した。

数えるときりががない。小諸の島崎藤村の千曲川の定宿、川端康成の鎌倉の家、三島由紀夫の家、森鷗外の旧居記念館や舞姫を書いた部屋、遠藤周作の好きな目黒の蕎麦屋、梶井基次郎の湯ヶ島の宿、それらにまつわる話は、文学から遠ざけられている私の残された心の泉を潤してくれた。

海辺への旅も印象深い。千葉の銚子を訪ねたのは夏も終わりの頃だった。Sが好きだった、また発見したといつてもいい、詩人三富朽葉の溺死したところだった。小高い砂丘の上から、海に浮き出た岩を指さして、あのあたりで溺れた、と彼は説明してくれた。彼の象徴詩はメランコリーを底に沈めた清冽な弱い光に似ている、そして二十七歳で燃焼した。

私は「夏果つる海満身の青放ち」という句を作つてSに見せた。Sに褒められたのは久しぶりだった。

翌日は汽車を乗り継いで布良についた。青木繁が名画「海の幸」を描いた海岸で静かな何の変哲もない海である。その絵は青春の真つただ中、友人たちと泳ぎ絵を描きはしゃいだ日々の時間の、夢とロマンに満ちている。Sは続けて言った。その翌年、青木はその後の絵の評判は落ち、貧乏のどん底で苦しみ、恋人タネの妊娠もあるのにまた二人で布良を訪れた。朽船の釘を焼いて寺の戸板に絵を描いた。どんな哀しい感情で布良の海を見つめたのだろう。

私は一度彼の遺作を見た事がある。病身の彼が描いた絵は佐賀県の唐津の海から昇る「朝日」という題だった。私は知っていた、唐津の海からは夕陽しか見えない。彼はほんの数年前の布良の海岸の楽しい時間を思い出して、その時昇つた朝日を思い出して、唐津の海に沈む夕日を朝日と言い張つて強がつて描いたのだろう。

私たちは夕方まで海を見ていた。そして私は自分の勘違いに気付いた。その海にも夕日が沈んだ。ただ朝日のように輝いていた。

Sが九州に来たこともある。日本の西の最果ての五島の海を見たいということだった。

私は喜んでレンタカーを運転した。その五島の三井楽の海は静かな夕陽に色づいていた。雲は穏やかな桃色の絹のようにたなびき、大きな金色の太陽を抱いている。それが海に落ちると赤黒い不吉な空が広がるが、隙間にはつとつとするような水色の空が覗く。それもすぐに闇に沈む。

彼はまた私の知らない話をしてくれた。お彼岸の日に真西に沈む太陽に祈りを捧げると、亡き人の魂に会えるという伝説がある。昔、遣唐船に乗って何年も帰らない夫を探しに都から妻がここに訪ねて来た。そしてお彼岸の太陽を拝む、すると夫の懐かしい声が聞こえて来る。妻はその声を追って海に向かつて歩き沈んでいったそうだ。

Sとの思い出は尽きない。私はものが書けなくなっても、彼の話を聞いて質問したり感想を言ったりすることで、ものが書けない悲しみの穴埋めをしていたともいえる。そしていつかまた、ものを書きたくなったら、その時は今遊んでいることが思いだされ、激しい情熱になつて噴き上げるのではないかと、と微かな期待を持った。

ただ最後の思い出には、重たい海の闊しか浮かばない。

春と言つてもまだ寒い頃だった。三浦半島の岬を回りたいので運転してくれと言われた時、私は仕事の用件を作つて上京した。その頃日本に滞在していたサンドラが一緒だったと知つた時、私は嬉しかったが、Sの気持ちは分からなかった。今は、何も思い出せない。三浦半島の南端で、水仙の岬と

いうだけで車の行程も岬の名前も記憶にない。最近になつてその辺りをネットで調べたが、見覚えのない近代的な公園の写真があるだけだ。もう四十年も経っているのだ。

濃い灰色の空の中を、両側を海に挟まれた小さな岬のなだ

らかな傾斜に沿つて降りていく。石ころだらけの小坂、寒い岬を覆つた白い水仙の群生が、薄闇に浮かびあがつたまま黒い海に落ちていく。そして波打ち際に白い波になつて砕けている。足元にも密集した水仙を踏みながら小道を歩く。

サンドラとSは黙つて先まで歩いていく。彼女が花を摘んで匂いを嗅いでいるのが遠くに見える。それを無造作に捨てる。髪が風にそよぐ。私の周りにも甘く哀しい香りが漂っている。

風が耳元を過ぎていく。囁きでもない哀しみでもないただの無音の虚しさだけの風だ。

サンドラが水仙が好きで、ここに来たいというものだから、君に頼んだ、とSが言つたのも何かの言い訳にしか聞こえなかった。二人の間に何かあるようで、楽しそうではなかった。私もしゃぐことはなかった。水仙の花に囲まれているという事実が残るだけだった。

私はこの散歩の時間にいくつ俳句ができるかやってみようとしたが、気に入つたものは一句もできなかった。可憐な水仙、灰色の空、黒い海、風の吹きすさぶ岬、薄闇になびいて光るサンドラのお金髪。空咳と喉の痛みしか出てこなかった。

哀しみが胸の奥から溢れ出そうだった。

何処までも続く泥沼のような、また乾燥した仕事の日々、私はまだ愛する女を得ていなかった。酒の騒ぎの中の女しか知らなかった。耐え忍んで愛を捧げる女を知らなかった。今そのことが悲しかった。この時から私は俳句を作るのをやめ

た。

今になって思い出してみても、白い水仙の群生が闇の中に渦を巻いて漆黒の海に雪崩落ちて行き、ちぎれた花びらが蚊柱のように舞い灰色の空に吸われて消えていく映像しか残っていない。

家に帰ってしばらくして、S著の「泉鏡花と花」が届いた。これも五百ページを越える大著だった。いつかゆつくりと隔離された時間の中で読みたかった。あとがきだけは読まねばならなかった。ただ昔、話を聞いたり、読ませてもらった部分を読み返してその頃のこと浸っただけだった。

五か月ほどあとの次の上京で私はホテルを取らねばならなかった。Sと電話の連絡が取れないまま訪れると目黒の事務所は閉まっていた。私はそのあたりを歩き回った。出会えるかもしれない、深夜まで無駄と思いがら歩き回り、何か痕跡がないか探した。サンドラの連絡先も知らなかった。「泉鏡花と花」の本に挟まれた、サンドラをよろしく、というメモ書きが思い出された。その時は意味が分からなかった。私は涙が浮かんできてこぼれそうになってもそのまま歩いた。歩きなれた目黒の街並みだった。Sが度々語ってくれた、梶井基次郎が彷徨って求めた目黒の闇だった。行人坂や目黒川の散歩を思い出しても虚しかった。もうSが与えてくれた私の有意義な心の糧の時間は終わった、心の潤った青春時代はもう消えていたのだと思うと悲しかった。

何かが起こったのだ。いつかもこんなことがあった。連絡が来るかどうかはもうわからない。多分もう来ないだろう。それが確信できるまでただ待つしかない。

しかしもう私と関係がないのだと思いつつもした。今までの私はいつもこんな風中途半端だった。これからは私も自分の世界、事業の冷たい世界にもっと入り込んで行かねばならない。

Sの行き先はアパートの管理人もオーナーも知らないといった。毎月の家賃だけはちゃんと払ってきている。追求すれば何かが分かったかもしれないが私はそうしなかった。私は彼の手元に届かないかもしれない手紙をその住所に送った。行く当てもなくどこかに捨てられるかもしれないが気が持ち込めて書いた。そのあと一年くらいたつてから、ふと思いついて管理人に電話してみた。その時はすでに事務所は引き払われていた。

そうやって長い時間が経った。

## 「五」

人の生の時間は、何かに集中していると短い。そしてある事を成し遂げても、中断される事を認識するとあまりに短く虚しい。毎日悔悟の涙にくれる死刑囚が断罪されるまでの時間は短い。

ただ人生を享樂と共に過ごすと決めたら、長短に関係なく

日々は流れ、虚しさを覚えるほどではない。虚しさは当然のことだからである。どちらの人生に身を任せるか、また選ぶかはその時の流れか、否応なしに強制させられるかだけだ。

結局私はSが送って来た物を読んで、最初に一番古いノートを書きなぐりの断片に目を通すと逃れられなくなった。私のために書きとめられたものに間違いはなかった。

ただ先に古いフロッピーディスクとUSBの何個かを開いてみた。マラルメとヴァレリーの初期の詩の翻訳があり、いつか全訳を試みたいと言っていたSの言葉を思い出した。そして日付を見ると三十年以上も前から続けられているのには感服したが、読んで行ってもだんだん難しくなつて理解できそうになかった。彼は私のためではなく、己自身のために少しずつ続けたのだろう。私は途中でやめた。まだ全訳は終わっていない。

ノートの断片とメモリーに残された文章の書きなぐりに私は激しい衝撃を受けた。それは決して現実とは思われないような驚くことが述べられていた。彼の手慰みに書いた架空の物語だと思った。お伽噺だ。こんなことは私の知っている尊敬するSの出来事だと信じるわけにはいかなかった。あまりにその乖離は大きかった。これは彼の夢なのか、耄碌した私の妄想なのか。

しかし老いた私だから最後まで読み通すことができたのだ。

彼がなぜそんな人生を選んだのか、長い悪夢に魅入られて逃れられなかったのか。そう考えながら、奇怪な闇が色鮮やかに描かれた深い夢の深淵に私も落ちていった。

それは一種の私の絶望でもあった。私のこれからの老後の続きはもはや何の意味もない。私の心は激しく揺れ動き、爆発しそうになったが、次の瞬間はすぐに果てた。それが結論だった。

ただ私はノートの断片の端々から想像して、Sの物語を書き残さねばならないと決心した。現実の裏側のような世界に引きずり込まれたSの時間だった。彼は己の現実を捨てて、悪夢の架空の美に身を投じたように見える。本当に煌びやかな虚構の世界がそこにあつたのだろうか。

いや虚構であるがゆえに最早存在しない。そして私の力の及ぶ限りの想像を投入しなければ、この美に満ちたともいえる虚空を描けないだろう。そもそもそれは芸術、哲学としての美なのか。またそれは真実の美なのか偽りの美なのか。少々の間違いはどうでもいい、私の全身の力を入れて書く。長い間ものが書けなくて悶々とした鬱積した時間を過ごして来た。あがいてもペンを握る力は湧いてこなかった。底なし沼から浮き上がることはできなかった。いまこそ書き残すことが私の使命だ。

## 後 散華遊行

「一」

Sはまず家族の歴史と自分の生い立ちから述べている。

S著の「近代の狭間に生きた文学者たち」に書かれた、農家出身の若い運転手を誘惑し、情死した華族出身の子爵Kの妻晶子はSの実の祖母にあたる。

Sは祖母の生きざまに深く共鳴していた。伝えられるその美貌と明晰な頭脳は彼の懐古趣味だけではなく懐かしく尊敬できるものだった。その血を引きついているのは彼の誇りだった。

晶子の冷たい光を放つその美しさは時に傲慢であつたが、それに抗う勇氣は誰も持たなかつた。華道茶道舞踊よりも洋楽を好みピアノ演奏や声楽のすばらしさは他を抜きんでいた。人はいい意味でも悪い意味でも、彼女を夏目漱石の虞美人草の主人公の女性、藤尾に似ていると噂した。

彼女は旧来の封建社会へ立ち向かおうとする女性たちの先端を走っていた。「青鞨」や「婦人公論」「主婦の友」の創刊、柳原白蓮出奔、神近市子の日蔭茶屋事件などの時代だった。Sは「それまで、陰湿な熱のこもった室の中で、発酵して形を成すことのなかつた女の感情が一気に噴き出した印象・・・」と述べている。

「青鞨」創刊号には和歌を数首出したが、鳳晶子「後の与謝野晶子」の評判の陰に隠れて惨めな思いをした。しかも同じ晶子という名前はさらに屈辱だった。彼女は和歌をやめ論文調のエッセイを書くようになった。喝采で迎えられたが、それも伊藤野枝という若い彼女の発表する記事に押され、焦りは時間を追って深くなった。

そんな知識階級の女性には晚い結婚しなかつた。それに加えてお人よし両親の没落華族の貧乏な家庭生活は他人には知られたくなかつた。彼女の愛したピアノは借金の抵当に消えていった。両親の懇願があつて晶子は格下の資産家の子爵に嫁いだ。

前述のS著「近代の狭間に生きた文学者」に書かれているように、Kの父は日露戦争で功績を上げて子爵を名乗る地位を得たものでにわか華族だった。

Kは朝香宮の嫡子が軍事大学中にフランスへ軍事研究のため留学した時に随行した。妻の晶子には一歳を過ぎたばかりの娘がいたので彼女を同行しなかつた。代わりに妾の一人を連れていき、彼女が滞在中は妻のごとく振る舞った。度々のパーティーでも評判がよく、多くが彼女を正妻だと思っていた。後に晶子の知るところとなりそれまでも屈辱を味わっていた。夫の振舞に晶子の怒りが重なりその限界を越えてしまった。

しかしKから受けた無骨な屈辱に応えるには投げかける軽蔑だけでは足りなかつた。夫の無教養を世に晒し、恥を全身に浴びさせねばならなかつた。それは夫が低く見る低層階級

の人間と情死することだった。晶子は朴訥な青年の運転手を選んで誘惑した。都ではさすがに彼女も自分の死顔を知ったものに見られるのは嫌だった。知名氏となった夫の出身地の所有する山林で運転手と情死を遂げて復讐するしかなかった。若い娘を残す未練は断ち切った。

愛という思いなければ抱き合う今日のわが身の切なかりけり  
悲しみと怒りに耐えて木蓮は露こぼさじと上むきて咲く  
死を目前にした錯乱の中でこの二首を残している。

帰国した朝香宮は西洋文化に染まって、アールデコ様式の屋敷を目黒に建てた。アンリ・ラパンというフランス人が設計した。現在の朝香邸庭園美術館である。

子爵Kも見晴らしのいい郷里の小山を切り開き洋館を立てた。妻の情死という不名誉な噂を打ち消すためだった。アンリ・ラパンの友人が設計した石造りの潇洒な家だった。大理石のエントランスへ降りて来る階段の装飾は誰もが目を見張った。

遠くの山から昇る朝日はまず洋館とその裏庭を輝かせ、夕方には表のベランダから変化の少ない市内と水平線に夕陽が落ちる港が一望できた。

Kは晶子の両親と妹と自分の娘をそこに住まわせた。娘は長らく晶子の妹が世話をした。Kは懐の太い人間を演じ、行く当てのない晶子の両親は感謝しなければならなかった。日

当たりのいい庭園は年毎に広くなった。費用は所有する鉱山の利益で十分だった。またついではあるが、パリで知り合った華僑の一人の親友と組んでかなりの資産を得ていた。辛亥革命の直後でそれは秘密裏に長く保管された。第一次大戦でも裏の資金がKのために多く流された。

市内は近代化の波にのって次第に発展し、近くの山林の開発でKの資産はさらに増えた。

晶子の娘は里子と名付けられてなるべく外界と遮断されるように育てられた。幼い頃は屋敷内と絵本と庭園だけが世界だった。学校生活を適当に過ごしても、制限された生活に従順だった。ピアノと裁縫手芸の家庭教師が外の世界とのつながりだった。それに多くの時間が費やされたが、太陽の光を浴びるには庭園の園芸の時間で十分だった。そして四季折々のあらゆる花々を絶えることなく開かせた。知らない花でも翌年には花開いた。絵本とピアノと手芸と園芸、彼女はどれにも喜んで熱中し飽きなかった。

Kは里子を溺愛したかったが、それは彼女を閉じ込めておくことでしか表現できなかった。十八歳の時、彼女は父の連れて来たある大学の若い教師と結婚した。彼は養子となり相應の身分に満足する大人しい男だった。経理専門の教師で、休みは山間の溪流で川魚を釣るのが趣味なくらいだった。

やがて娘が生まれた。情死した母親と同じ名前が付けられた。Kは反対したが里子が珍しく言い張った。里子はいつの間にかその母の事を聞いて知っており、晶子という名前を付



けて記憶にない母親への愛情を示したかったのだろう。三年後に息子が生まれた。それがSだった。

時は日中戦争の真只中だった。中国各地の都市が日本軍に陥落し、満州国は混乱の戦況にあつても多くの日本人が移住していた。満州鉄道は基幹産業で多くの利権も絡んでいた。満州鉄道はもともとロシアの所有であつたが、日露戦争後に日本に託されたものだった。

六十歳を過ぎて軍籍を離れていたKは戦争商人となつて蓄財に暗躍した。満州国における先祖の顔とコネはまだ役に立った。度々渡る首都奉天と田舎の郷里を往復するたびに彼の隠し資産は増えた。

太平洋戦争に突入した時、邸宅は黒く塗られ古びた態をなし、裏庭は畑に変えられた。幸い地方都市に爆撃はなかつた。か細い力しか持たないように見えた里子の夫は自宅のすべてを管理下に置いて見事に取り仕切り、苦難の時代を乗り越えた。

終戦直後にKは市民の恨みのため襲われ満州で落命したが、その存在はもはや必要なかつた。里子をはじめとして彼の死を悼む者はいなかつた。満州鉄道の株券やいくつかの権利書は紙くずになつたが、将来性のある手元に残すものの里子の夫の見立ては正解だった。

戦後の米国駐留軍のKへの追求は死亡のために不問だった。加えて戦後四年後、蒋介石が中共軍に破れて台湾に逃れた

時、そのシンパだった華僑の一人が日本へ来てK家を訪ねてきたことがあつた。Kの親友だということを家族は知つていたので手厚く迎えた。彼は何枚かの紙切れの権利書をKの遺族に渡した。約束だということだった。それも後に思わぬ資産の一つになつた。

また朝鮮戦争の景気とインフレーションはK家の資産の倍増を後押しした。所有する株券はどれも日本の基幹産業の成長とともに高騰した。

## 「二」

Sの曾祖父父母、亡くなつた晶子の両親はそこで相次いで亡くなつた。静かな老後だった。晶子の妹は嫁いだ。Sには両親と姉の晶子と家政婦の変化の少ない日常が続いた。父は大学を定年まで勤めた。教え子が時折訪ねて来た時は、丁寧な対応と自宅の豪華さに感嘆して帰つた。彼はただ読書と溪流釣りができれば満足だった。川魚の甘露煮や塩焼きは家政婦の得意料理になつた。資産の管理は正確になされ、教え子の公認会計士がそれを着実に守つていた。

里子は趣味に明け暮れた。家庭教師の手を離れても一人で針を刺す時間は飽きることはなかつた。最初の頃は二、三の友人が定期的に通つてきて楽しんでた。四季折々の庭の花が図案の多くだった。白い糸だけの刺繍は表には出さなかつた。記憶にはない美しい母のことを考える時間だった。

ある時刺繍仲間の一人が、本加賀友禅の本振袖を昔母から受け継いで娘にやりたいが、一か所大きな傷がある、と言ったことがある。里子はそれを借りて、そこに大きな白牡丹の花を刺繍して返した。緋色にそれは見事に映えた。それからまた刺繍仲間が増えた。教室を開いて人を集めようという話も出たが彼女は賛同しなかった。

刺繍は時には大きくなり、タペストリーになったりした。古今の名画が題材で、里子の気に入りは、フランスの画家クルーベの「森の中の仔鹿」だった。新芽の溢れる森のせせらぎを蹴って少女のような仔鹿がこちらへ向かって逃げてくる。広間の一隅に掛けて里子は満足したのか、タペストリーはそれが最後だった。

音楽の好きな友人も集まって来た。鑑賞会が次第に里子のピアノや歌曲の小さな演奏会になった。ピアノは、シヨパン、シューベルトとシューマンが好きだった。歌曲はフォーレの作曲によるフランス詩が多かった。

人数が増えるとコーラスを楽しむようにもなった。大学を引退した音楽教授に指導に来て貰うことにした。彼の指揮は正確で広間は教会の中のような澄んだ清らかな音を響かせた。友人たちをもてなす昼食も評判が良かった。参加したい希望者もいたが誰でもいいというわけにはいかなかった。仲間の送迎のために午後にはハイヤーが玄関に並んだ。

晶子とSはこの自由な家庭でなんの制限もなく過ごした。

Sは乳離れすると晶子の後ばかり追いかけるようになった。晶子もSを可愛がりいつも一緒だった。夏には庭のプラスチックのプールでは素裸でじゃれ合った。風呂も一緒に入って遊んでいた。寒い冬は同じ布団で寝た。晶子が女兒から少女になり少し大人びてくると次第に距離はできたが、Sはおそろおする彼女の後を追っていた。

晶子は美しい少女になっていった。いつも紫色のリボンをつけるのが好きだった。里子はセピア色の黒ずんだ母の写真からも娘の美しさを確信していた。小学校に入ると取り巻きの友人が訪ねてくるようになり、両親も歓迎した。手芸の真似事やコーラスの邪魔をしたりして大人を喜ばせた。高価なおやつは十分に用意された。Sはいつもその片隅にいた。父はハイヤーを雇ってその小さい友人たちも送迎させた。

Sには特別に親しい友人はいなかった。部屋にこもって世界少年文学全集を読むのが好きだった。スチーブンソンの宝島や南総里見八犬伝など冒険ものも好きだったが、ジャンクリストフやアンデルセンの即興詩人などは繰り返し読んだ。目の前にある現実よりも本の中の世界の方が美しく真実味を帯びていた。そして詩や俳句を書いては少年雑誌に投稿したりしていた。庭から続く裏山を散策するのも好きだった。色づいた森の奥は神秘に満ちて薄闇に消えていた。いつかその奥へ進んでみたいとも思っていた。

ある秋の日、母が二階のテラスから海に沈む夕日に手を合わせているのを見た事がある。訳をたずねると、好きだった

亡き人の声が聞こえると話してくれた。日本の西の果ての海の言い伝えということだった。母は涙を浮かべていた。その夕日の静かな美しさは何時までも印象に残った。それはまた一瞬激しい暗赤に燃え上がったが、いきなり漆黒の闇に包まれて消えた。

母の話に、日本の歴史や文学にも興味は深まった。

十六歳の頃だった、父が一度溪流釣りに連れていってくれたことを思い出す。秋も深い頃だった。山奥は紅葉で黄色や赤の原色で燃え上がり、その隙間から鋭い紺碧の空の光が射し込んでいた。だがSの気持ちを掴んだのは、薄暗い森の地面を敷き詰めた落ち葉の紅葉だった。湿って発酵しようとする一面の落ち葉の色は、光を浴びて空へ向かって照り返す葉群よりも美しく見えた。樹間も道も柔らかな悪臭を漂わせるような美しい原色に満ちていた。

そこでSは奇妙なものを見た。落ち葉の腐っていく堆積の間から二本の角が突き出ていたのだ。これは鹿の死骸だ、と父が教えてくれた、体は溶けてしまつて落ち葉に埋まつて、骨だけが残っている。哀しい異様な美しさだった。しかし孤独の中でじつと自分の死を凜として見つめて死んで行つたのだ。Sは目に熱いものを感じた。

それはたまたま数日前に読んだある詩に感動して涙がこぼれたのを思い出したからだった。全くの偶然だった。

鹿

村野四郎

鹿は 森のはずれの

夕日の中に じつと立っていた

彼は知っていた

小さい額が狙われているのを

けれども 彼に

どうすることができただろう

彼は すんなり立つて

村の方を見ていた

生きる時間が黄金のように光る

彼の棲家である

大きい森の夜を背景にして

少年Sはなぜ涙が流れたのかは分からなかった。生きること、死ぬこと、愛すること、黄金のように光る時間、それらが混じり合つて意味もわからないまま胸に膨らんできて抑えきれなかつたのだ。

Sは思春期の真つただ中にいた。身心ともに未知の世界が目の前にあるのを肌で感じ、そこへ無意識のうちに飛び込まねばならないと思い、またその欲求がはちきれそうになる時である。生と死と愛が何者であるかわからないまま、それに悩まされてその渦に巻き込まれて苦悩する。海底のマグマが

いつ嘖き上げて来るか予見されない不安の時でもある。ゆえに不運な者は不吉が予見するように嘖き上げたものに巻き込まれ不幸に陥り、時として悲劇がおこる。

晶子は成長してますます美しくなった。大きくはないが澄んでくつきりした目元と艶のある黒髪は強い意志の持ち主を示していたが、笑う時の頬の柔らかさと、白い歯をのぞかせる唇はただ赤いだけでなく、ウエヌスの唇がそうであったらるうと思われるほど控えめで深い色を帯びていた。

幼い頃からの友人たちの訪問はもう何年も続いていたが、人数は増えなかった。時折男子生徒も来たが女性の華やかさと気位に押されて続いては来なかった。晶子のピアノは上達し、友人たちと一緒に母親たちのコーラスにも加わった。Sは女性たちの仲間には入らなかった。

Sはある時激しい胸の高まりを覚えそれから急に気分が沈み、晶子の友人の前になくなった。

彼女らのコーラスはフォーレ作曲のレクイエムが得意だった。暗闇の奥から淡い光が静かに周りを切り開いて空へ舞い上がっていく。清らかで内には激しさも込めた哀しみが天上に昇っていく。哀しみはなぜ美しいのか。

死者を弔う歌だが、Sには自分の魂が削られるような気がした。罪を犯し秘かに生きながらえる惨めさを拭いきれない人間のような気がした。前に立って歌っている晶子の唇の動きに吸い込まれ、喉の奥まで見えるような艶めかしい口と声

に打たれると悲しみが吹き上げて来た。その魅力に目を凝らすのは耐えられない哀しみだった。

それが罪であることをSは知っていた。Sははつきりと自分は晶子が好きであると確信した。それが愛と呼べるものかどうかは分からない。そしてどうなるものでもないのは分かっている。自分の心の奥底に秘密を閉じ込めておくしかないが、それも罪だろうか。

翌年の春、父が庭にプールを作ってくれた。父は魚の堀を造ろうと思っていたが、プールが欲しいといった晶子の言葉に従った。日当たりは良い。家族も訪ねて来る晶子の友人たちも喜ぶだろうと、魚用は断念した。

ポンプで吸い上げられた山水は清らかで冷たく、灼熱の太陽の熱も真夏の熱風もそよ風が肌を乾かせていく心地よいものじか感じられなかった。紺碧の空はプールの水をさらに透明に光らせた。

晶子の友人たちは色とりどりの水着ではしゃぎまわった。跳ね上がる水飛沫さえ色づいているほど華やかだった。笑い声は邸宅と山の間にこだまして、昼の空に舞い上がった。Sは男一人は恥ずかしいと言いつつ泳がなかった。

晶子は一人純白の水着を身に着けていた。水着に締め付けられ、整えられた身体から美しい四肢が伸びている。それを一瞬目にしたSはほとんど同時に眼をそらせた。その肢体は美しく眺めるものではなかった。そのどこでもいい、ほんの

一部にでも唇をつけなければならぬという自分の宿命を感じるものだった。衝撃に似た胸のうねりは高まったができるわけはなかった。プールの淵を歩く美しい姿は背後の林を真っ黒にして映え上がった。のぞみと現実の狭間でSは身動きできなかった。焦燥と悲しみで体の力は失せた。暗い宿命に憑りつかれたようだった。彼は部屋に戻って蹲った。

彼は数日間寝込んだままだった。眠れなかったが眠ると何回も夢精した。清楚な晶子の立ち姿の周りを妖艶な女性たちが囲んで踊る。猥雑な色の絹布が舞い、誘惑しながら遠のいていく。彼はそれを追おうとするが体は動かない。諦めて哀しみに浸ろうとすると、気持ちに反してゆるやかな快感が襲ってくる。あとには惨めさだけが残る。

しかし彼の理性は残っていた。この苦悩は心の奥底に閉じ込めておかねばならない。いずれ忘れて流れ去るか、幼稚な夢としていつか思い出すことがあるかもしれない。将来愛する女性に出会っても晶子の面影を求めるかもしれないが、誰も知らないことなのだ。

まだ幼い頃、驚かせようと後ろからこっそり近寄って、背中を抱いたこともある。柔らかな毛糸のセーターと匂いのいい髪の毛の白いうなじにほとんど唇がつきそうだった。その時晶子は振りほどいて最初は怒っていたが、後で優しくSの鼻を指ではじいて、ダメよと笑ったものだった。

そんな軽い感じでこれからも対応することだ。これを自分の苦しみとして真剣に取り組むことはおかしい。苦悩などと

大げさに意識することは滑稽だ。秘密は暗所に閉じ込めておけばそのうちに溶けて流れ去るだろう。彼は少し安心して起き上がった。

しかし悲劇は起こってしまった。

まだ夢のまま午睡から覚めて、心地よい余韻に浸っていた。秋の日は落ちかけている。窓から見える裏山の椽の黄葉が、海に去っていった夕日の名残に照らされて金色に輝いている。

長い夢を見ていた。フォーレのレクイエムが静かに流れる森の中を、すんなりした脚の仔鹿が逃げてくる。仔鹿は自分が撃たれるのを予感している。助からないのを知っている。血が吹き上がる身体を見つめながら、彼は自分が死んで行くことを知っているのだ。その仔鹿が愛おしい。

ぼんやりした頭で部屋を出ると、隣の晶子の部屋のドアが少し開いているのが目に付いた。覗くと彼女の後姿が見えた。胸だけの素肌に真白な毛糸のセーターを頭から被ろうとしていた。悪戯小僧になった気持ちで、傍によつて両肩を掴んだ。微かに胸の柔らかさに手がふれた。その瞬間、首筋に一瞬でいいから口をつけたらという気持ちで当然のように沸き起こった。ほんの少しでもいいのだ、それは冗談で罪にはならない、許される、それが確信のように胸につき上がった。小さなだが晶子は昔のように冗談として受け取らなかつた。小さな叫びを上げて彼の手をすり抜け、部屋から出ようとした。

Sは冗談だ、ごめん、と言おうとして肩を再び掴もうとした。頭は空白で身体と声が上がらずにいるのだけが分かった。彼女は部屋を逃げ出した。Sはその時自覚していなかったがその眼は抑えられない暗い炎に燃えていたのだろう。

部屋の前は階段だった。彼女は階段を駆け落ちていって大理石の床に横たわった。家政婦の驚いた声があった。Sは部屋に戻った。しばらくして救急車のサイレンが聞こえてきた。冷静にならねばならないと思ひ込もうとした。

それから数か月、何か月だったか何が起こっていたか記憶にない。頭の中は空白でSの思考力は停止していた。晶子の入院は長引いた。両親は病院に泊まり込んで帰ってこなかった。ほんの時たまSに会うと状況を伝えた。階段を落ちただけならまだよかったが、一段目の大理石の角に勢いよく首がぶつかりその衝撃が大きかった。晶子の意識は長い間戻らなかった。脊髄損傷で危険だったが、脱臼と骨を削り神経を通す手術が行われ一命はとりとめた。これからさきどうなるかどうかについても両親は覚悟していた。Sの見舞いは許可されなかった。

Sは冷静だった。もし晶子がこのまま死ぬことがあつたら自分は間違ひなく自殺する。もし死なずとも自分の悪行が晒されることになつても同じだ。そのいずれの場合でも、自分は晶子を愛していたと、はっきりと公言する。

彼は裏山の森の中を彷徨った。何処を見ても死に場所に相応しくなかった。その時が来たら一瞬にして死にたい。木々

はずつかり落葉していた。美しい紅葉もなかった。森は何もないただの無音の空間だった。身体を撫でていくそよ風さえ通り抜けなかった。乾いた胸は錆びた釘で引き搔かれ血を流しているようだった。

何も考えずに時間を潰すには、控えている大学受験勉強をすることだった。それにしばらく熱中することもできた。

晶子との面会を許されるまで、どのくらいの日々が過ぎ去つたのかわからなかった。もう意識もはっきりし、情緒も安定してきたといわれた時は長い時間が経っていた。Sは一人だけの面会にでもらった。

まだ首に包帯をしたままでやはりやつれていた。皮膚は萎んでいく花びらのようだった。しかしそれはさらに静かな美しい眼と形の良い薄い唇を際立たせていた。Sはベッドの横に膝をついて顔を伏せしばらくしてから晶子の顔を見あげた。なんと言つていいか分からなかった。ただ謝罪に言葉をかければいいというものではなかった。貴女が好きですとも言えなかった。

最初に口を開いたのは晶子だった。その言葉を聞くとSはわつと声を出して泣き出して顔を埋めた。嗚咽が続いた。晶子が差し出した手は涙で濡れた。Sはその手に頬と口をつけた。彼女は、大丈夫よ、誰にも何も言わないから、と言つたのだつた。

しばらくして晶子のリハビリが始まったと聞いた。下肢が麻痺から回復しないということだった。

晶子は車椅子で帰ってきた。介護専門の家政婦が一人増えた。平行棒が取り付けられた小さなリハビリ室も作られたが、週に一度は専門施設に通った。客室用に準備されていた寝室の一つは、手摺に囲まれた晶子専用の風呂とトイレに改造された。

晶子の部屋を一階に移そうと父が言ったが彼女は嫌がった。我儘が通って二階の部屋のためにエレベータが取り付けられた。母の時間はほとんど晶子に付き添う世話のために費やされた。

体力が少しずつ戻ってくると、晶子の理性はかえって強固になった。挫けて嘆いても何もならない。不運を悲しんでも救いにはならない。誰を恨むものでもない。原因を悔やんでも過去に戻って回復できるものではない。

遠慮していた里子の刺繍やコーラスの仲間がまた集まって来た。晶子が勧めたのだった。晶子の友人たちも少しずつ戻って集まって来た。晶子の上半身は通常だったのでピアノに熱中できた。車椅子はピアノ演奏用として別にも用意された。コーラスは世界の民謡からオペラの一部に及んだ。リハビリ施設以外の外出を嫌ったので、観劇に行けない代わりに大きなテレビが設置されオペラの映像が流された。

晶子は大学を辞めた。毎日父がフランス語と文学の講義を

した。朝と夕方は父が車椅子を押して庭を巡った。新しい造園計画を話し合うため専門の庭師が来た。晶子はすべての花を植えたいと希望した。それも自然な形で乱雑に咲き乱れるのがいいと言った。

かつてのように気ままな好きな時間を楽しめないのは仕方がなかった。かわりに午後の昼寝は重要な日課になった。目覚めると機嫌は良かった。そばには母がいた。

ただ小さなことで気に入らないこともある。ちよつと気分を害した表情を見せると、周りが必要以上に気を使うことは仕方がなかった。晶子の我儘は許された。それは時には傲慢な振舞になった。だが決して他人を見下したものではなかったし、凛とした趣があつたのでむしろ晶子の美しさを際立たせるだけになった。それ故に取り巻きたちは去って行けなかった。

Sは大学受験勉強にさらに熱中した。揺れ動くとする心を静めるには、無機質な数理定式に頭を使うことが心地よかった。国語や社会科の勉強も感情を捨ててその無機質の方式に従わせた。成果はあがつた。不幸なアクシデントは過去のものとなった。しなければならなかった。小さな傷にして残すだけにすべきたつた。

東京の大学も考えたが、遠くにいくのは逃げていくよう気が引けた。結局隣の国立大学の文学部仏文科に入学した。時々気楽に帰るのもいい、やはり家は懐かしい。

新しい学生生活はSの性格を変え、こたわったわだかまりを少しづつ削ぎ落した。同じ本を読んで感動した仲間と、珈琲と煙草の香りに包まれて語り合うのは今までにない楽しみだった。時間はすぐに過ぎた。周りには本に限らず映画や音楽や芝居など、感動するものが溢れていた。今まで知らなかった、感じなかったことに触れるとすぐに吸収した。新しいものに出会い、それを理解すると成長した気がした。

いくつかの小説を書いたが評判は良くなかった。他の作家の作品はよく理解できた。フランスの現代作家が語る古典文学にも当然興味は深まった。今は存在しない、古い時代はこれから経験しようにもできない新しい世界に見えた。霧深い石畳の通りに街灯がぼんやり浮かぶ。馬車で駆けつける女性との禁断の恋。古いヨーロッパはSの秘かな憧れになった。

酒が甘いのに初めて気づいた。酔うと美しい音楽が深淵から聞こえてきた。十分な睡眠は朝の太陽に心地よく溶けた。

また悪酔いの酒の果てに女体も知った。湿った薫人形を抱いた気がした。後悔したが、時間が経つとまた再び彼女を求めた。晶子の姿を求めようとしたが、浮かばなかった。

晶子は懐かしい美しいものとして記憶に残したかった、そしてそうできた。家に帰ると抑えきれない何かを噴出しそうな怖れも僅かにあった。それで家に帰るのを控えて、淫猥な場所に足を踏み入れるのにも次第に慣れた。苦しさだけは消えた。

大学の五年間で家に帰ったのは三回ほどだった。両親との

会話は他人のように空々しかった。両親の歓迎の気持ちは分かっていたが、Sはそれを受け入れず自分の周りに壁を作っていた。晶子は頬を緩ませることなく、Sの視線を感じながらも目を合わそうとしなかった。

お互いの気持ちは分かっているはずだった。しかしふと我に返ると、誰にもさとられないように晶子の体のどこかに視線を集中させている自分に気付いたりした。肩を覆うセーターの隅でもその曲線が美しく感じられて懐かしいものだった。唇からはすぐに眼をそらした。その美しさには耐えられなかった。

ただSは冷静に自分を見つめることができるようになっていた。昔のあの甘い疼きを押さえつけ無関心を装うことに成功しつつあった。それは心の葛藤の末だった。内心では激しく揺れていたが、そうしなければならなかった。

パリ第五大学に一年間留学したのはSにとっては自身の大変革の経験だった。希望と不安と逃亡の気持ちだった。

教授が指定する本を読んでおいて、授業はただ教授が喋るのを聞くだけのことが多かった。ある教授はボードレルとマラルメ、他はジッドとヴァレリー、また他はカミュとサルトル、という具合だった。最初の三か月はほとんど理解ができなかった。日本語で読んでいても役に立たなかった。やっとなしわかってきたのは半年も経ってからだった。中間のテストは棄権した。

友人はあまりできなかった。最初東洋人と珍しがられても、



酒の席でもお茶の席でもこちらから喋らないと次第に無視されて外されてしまう。仲間外れにならない程度に喋るようになった時はもう滞在の時間は終わりに近かった。親しくなった女友達との時間は短いものだった。

カミュの書いた脚本をクラスで演じた時は進んで参加した。原作はドストエフスキーの「悪霊」だった。端役であったがその時の興奮は忘れられない。台詞を客席に向かって喋る、ほとんどそれは闇に向かって投げかける言葉だが、その声は闇から自分に語り掛けてくるように聞こえた。公演は大喝采を受けた。自信が一度にあふれてきた。

翌年はサルトルの「墓場なき死者」の予定だったが、それはSの帰国のあとになるので参加はできなかった。

名所旧跡を一応回つてしまうと、Sは文学者のあとを追つて街中を歩き回つた。その家や標識を見るだけでも満足だった。ボードレールの生家、ハツシシを飲みながらセーヌ川を眺めた屋敷、マラルメのアパルトマン、ヴェルレーヌの終の棲家、ランボオの泊まつたホテル、カミュのアパルトマンなど。一番熱心に辿つたのは、ジャンバルジャンが身を隠しながらパリに潜んでいた隠れ家、実際は存在しないが、小説に書かれた住所を探しその下町の雰囲気を味わうことだった。

六階の屋根裏部屋は毎回階段を使わねばならなかった。冬の寒い夜中、トイレに行くのに外に出て上り下りするのが辛く、ワインの空き瓶が役に立ったのも懐かしい。

Sは卒業し上京した。最初は就職したが機を見て独立した。出版社経営者として、また評論家としてやりたい計画が頭の中に山積みだった。一つずつ作り上げていく喜びは嬉しく面白かった。故郷はもう必要なかった。自信に満ちて将来を切り開いていけそうだった。年毎に仕事の範囲は広がり達成感を得ることができた。

ただ心の奥底に触れてはいけない一つの不安があった。目を向けてはいけないことだった。なるべく考えまいとしても、ふと浮かんでくるとしばらくは悩まされた。

今すぐの事ではないが、両親亡き後は晶子とあの家はどうなるのか、という不安だった。彼女をどこかの施設に入れて余生をただ無意味に過ごさせることしかできない。彼女は嫌がるだろうが、それは自分の責任でしなければならぬ。考えると憂鬱だった。その時に考えるさ、と思うことで気分を切り替えるしかなかった。

溪流釣りに出かけた父が遺体で見えたと連絡があった。岩場で足を滑らせて頭を打つたのが致命傷だということだった。丁度Sの会社で社員との問題が起こった時で、ちよつとパリにでも行って姿でも消してやろうと、居直っていた時と重なる。

Sは葬式には帰らずパリ旅行を選んだ。信頼しているいつもの会計士が取り仕切ってくれるはずだった。遺産相続や保険や今後の事などを相談されるのは、責務だろうが嫌だった。

母よりも晶子に任せられた方が処理はうまく進むだろう。Sは整理が落ち着いてから帰ればいいと決めた。

パリでは親しい友人と再会して泥酔し、気が乗らないままサン・ド二門の通りに立っている娼婦をからかいに行つた。懐かしい下町を歩いた。ある時はカフェに座つてぼんやりしている、一人ですか、と聞いてきた女性がいた。特徴のない普通の中年女性だった。狭い部屋で短い情事の時をすごしたが、金を要求されるとは思つていなかった。

パリから帰つても郷里には帰らなかつた。気持ちが大きくなつたというより、わずらわしさを避けたい雑な感情に縛られていた。それが一週間二週間と経つうちに結局年を越え何年にもなつた。母や会計士から、当然晶子からも何も言つてこなかつた。日々はうまく流れているのだろうと、少しの後母を抱きながらも安心していた。

長年書きたかつた泉鏡花論「鏡花と花」に取り掛かつた。現実が幻想の花に吸い込まれ、また気づかないうちに幻想から新しい現実が生まれてくる。ただほとんどが通俗的な作品であるが、読んできたマラルメの高踏派象徴詩人と共通する花の概念を見つけたからには書かねばならなかつた。「非在の花」という言葉を作り、これを今までの自分の思考の総まとめにしたいという思いだつた。時間がかかつたがすぐに上梓した。

忙しい日々が始まつていた。

「四」

予感していたものを意識の外に押しやつていても、それが実現すると長い間やはり身構えていたことに気付く。するとそれが今の一番重要な事柄になつてしまふ。

その時Sは仕方がないと受け入れたが、まだ心の奥底では逃れようとする気持ちが渦巻いていた。

会計士から一度必ず来て欲しいと手紙を貰つたのはある晩春の日だつた。庭の桜も散つている頃だろうと思うと、陰鬱な暗い庭が浮かんで来た。散つて腐りかけた花びらが鮮やかな低い満開の躑躅に降りかかり、やがてそれも萎れると、雨の暗闇から紫陽花が不気味な青紫の光を放つ。大学に入つてからフランス文学を勉強しながら、泉鏡花を読み始めたのは、その庭のせいでもあつた気がする。

Sが家に着いたのは雨の夕方だつた。家の中には湿つた氈の匂いに混じつて薬品の匂いが漂つていた。洋館の襖は想像していたが、薬品には気分が悪くなつた。

母は寝ていた。乳癌をずっと我慢して隠し続けていたが肺と肝臓への転移は早かつた。母は朦朧とした意識の中でSの帰宅を喜んだ。医者が毎日通つて来て痛み止めの処置をして、看護婦が一日中付き添つていた。S家専属の会計士が滞りなく手配をしてくれていて、Sは感謝して十分に礼を言つた。母は回復の見込はなくなつた。死を待つだけということだつた。

これまでは、お母様がずっと晶子さんに付き添っておられていました、これからはどうされますか、という会計士の言葉に答えることはできなかった。どこか施設を探してください、という一言はまだ出せなかった。

晶子が部屋で待っているとのことだった。Sは階段の一段目に足をかけた。大理石の滑らかな感触が心地よかった。そして下から部屋の方を見上げ、あの忌まわしい出来事を思い出した。しかしそれは懐かしい一瞬としてしか浮かんでこなかった。

部屋のドアは空いたままで、覗くと車椅子に座った晶子がこちらを見ていた。そうやってじつとSが来るのを待っていたのだ。白い毛糸のセーターと足には紫色の毛布を掛けている。白いセーターはSの胸に鋭く刺さった。あの時の罪の意識と悔悟の念がおこつてくると同時に、甘い胸の疼きが同時に襲つてきた。香水がSの動揺に乗って漂つて哀しみを沸き起こした。

それはほとんど絶望に近いものだった。昔と違つて晶子の眼は大きく鋭くなつていた。頬は白さを越えて透き通るほどだった。ほんのりと浮かんだ紅は美しかった。彼女は微笑んで彼を見つめていた。その微笑は猟師が獲物を狙つて、もう逃げられない獲物を狙つて、引き金を引く瞬間に見せる目の輝きを帯びていた。いや、すでに獲物を撃ち殺し、楽しみながら切り刻み料理をしようとする料理人のようであつた。

その眼の力強い美しさに魅了されながらもSは罪を追求されている気がして眼をそらした。

さあ、座りなさいよ、晶子は言った。Sは目の前のソファに座り込んだ。身体はそこに沈んだ。全身が快感の波に包まれているようだった。晶子に見つめられて身動きができなかった。

あなた、もう覚悟しなさい、私はここから動きませんから、よろしく頼むわ、と晶子はSを弄ぶように言った。

自信に満ちた残酷な声は、Sを侮蔑しているかのようだった。しかしそれに打倒されてしまえば安らかな場所が待っているような気もした。Sは次の更なる残忍な声を待っている自分も感じていた。

母は二週間後に死んだ。淡々と行事は進んだ。会葬者は親戚の僅かとコーラスと刺繍仲間たちだった。会計士が全ての財産を整理してくれていて引き継ぎは明解で簡単だった。相続税の計算も済み、自分への報酬も計算していた。大手の企業の株の配当は十分で、将来開発される予定の山林の価値もあがり、所有する土地の賃料などかなりの資産が残つてさらに増えそうだった。今後は年末に一年間の収支をまとめてくれるように頼んだ。

新たな介護兼家政婦として若い一人を選んだ。これからの長い時間を頼らねばならなかった。新しい家政婦に日々の用事雑用を指示し慣れてもらうまで時間がかかった。母と晶子

が直接つながっていた呼び鈴はSの部屋に変わったが、鳴ったことはなかった。

月に二回のコーラス会と二回の刺繍の会が再開されたが人数は減った。豪華な昼食とお喋りの時間を誰もが昔と同じように楽しんだ。昔と同じようにハイヤーは定刻に玄関に並んだ。

晶子との特別な会話はなく時間は流れた。Sは東京へ戻るきつかけを失ったまま時間が過ぎていくのに身を任せていた。何らかの方法でこの生活に決着をつけ戻らねばならないという気持ちは消えなかったが、どうするか具体的には考えつかなかった。

長い間の念願であった、ヴァレリーとマラルメの全訳を始めることにした。もしかしたら滞在が長引くかもしれないという予感がしたので数冊を持って来ていた。読むだけでなく全訳全集として出版しようと思っていた。これが自分の生きて来た存在の証拠になると考え、今の中途半端な生活の焦燥に目を閉じようとした。

目覚めの遅い晶子の朝の散歩をさせるのが日課になっていた。髪も梳かず手入れをしていない朝の素顔は、布団の中の身体を思わせ、かえって艶めかしかった。眼はやや腫れぼったいが、唇だけは引き締まっている。

荒れた庭は雑草がはびこり、車椅子の移動を邪魔した。長い間手入れのなされていない庭の中心の薔薇園は雑草にまみ

れ、遅れた春薔薇のいくつかが萎れかけた花を垂れているだけだった。紫陽花は花の散った醜い萼だけを重ね合わせて異様な塊の小山を作っている。

ただ雑木に張り付いてぶら下がった山藤だけが濃い紫色に染まっている。藤の蜜を求めて熊蜂が周りを飛んでも気にしない。殺伐とした様を彼女は楽しんでいるように見えた。トリカブトも内緒の場所に植えているのよ、ひっそりと雑草の陰で咲く紫色が好きなのと言った。

昼食は果物とパンと一切れのハムと白ワインと上等の紅茶だった。昼食後からは介護家政婦に任された。晶子はコーラスと刺繍の会のない日は昼寝をする。あとは簡単なリハビリをして入浴した。家政婦が入浴の後には萎えた脚に化粧水のような薬液を擦り込んだ。それは一種の悪臭であったが、屋敷に染み込むにつれて、彼女を包む芳香に変わっていくようになった。

家政婦は晶子のお気に入り、妹のようにかわいがった。晶子は自分の部屋以外に三部屋を使っていた。部屋はタンスのようで、一つは部屋中に京友禅の豪華な着物や帯が衣紋掛けに、また無造作に床に置かれて隙間もないほどだった。香が虫よけの代わりに満ちていた。もう一つは洋装の部屋で、着る機会のないドレスや衣類やスカーフが散乱していた。西洋の香水が漂った。あとの狭い部屋はテーブルの上には大きな紫水晶の割れた原石が置かれ、その周りに宝石箱からはみ出たダイヤモンドの指輪やネックレスなど宝飾品が転がっていた。

香水は気ままに揃えられてどれも少しずつ試されていた。二人はそのどれかの部屋で過ごしお洒落なコーディネイトを楽しんできた。晶子は気が向くとアクセサリーの一つを家政婦に与えたりした。時が経つにつれて部屋の中の物品は増えた。月に一度は美容師が来て髪を切った。特別の髪型やセットはせずに自然に流れるままにされた黒髪はいつも艶のある光に輝いていた。

夕食は毎日の込んだ料理が並んだ。市内の何軒かのレストランや料理屋と契約して順番に配達してもらった。シチュウなど暖めるだけで豪華な料理になったが量は少なかつた。ワインはシャトー・マルゴという極上の赤ワインに決まっていた。晶子はアクセサリーを日ごとに変えて身につけ盛装してきた。そしてワインの一口ごとに綺麗になっていくようだった。

夕食の準備ができると家政婦は帰った。Sとの二人だけの食事中は特別に語り合う話はなかつた。両親の思い出とかコーラスの歌とか食材の話程度だった。Sは料理を口に運びながら、晶子の視線に射すくめられ監視されている気がしたが、それは反面心地良いものでもあつた。一瞬、愛玩動物になつた気がしたが慌てて否定した。

そして朝の遅い時間の散歩までは会うこともなく特別な用事は何もなかつた。呼び鈴はならなかつた。遠くの闇の中の晶子の寝息だけは感じられた。屋敷が深い海の底に沈んでいる、Sはそんなイメージで夜を過ごした。

翻訳は少しずつ進んだ。ヴァレリーの難解な箇所に出会い考えこむことは心地よかつた。今は「精神の危機」や「地中海の感興」などの評論集を持って来ているがいずれ全作品集を手に入れねばならない。膨大な量になるが、それを置くのはこの家だろうか、あるいはどこか解放された自由な空間だろうか。

Sは今後どうするかをいつまでも決めきれなかつた。真剣に考えることが不安で怖かつた。それであまり考えまいとして結局時間だけが過ぎた。

すべてを放りだして逃げて行きたい。それはあまりに無責任だ。しかしそれを振り払って本当に自分は逃げていくことはできるのか。いや、と彼は自問した。晶子とのこの屋敷での生活はまだ短い時間だが、それを捨てることはできないだろう。彼女を孤独の闇に捨てて己のみ消え去っていく事は出来るのか。

半面、気を緩めるとこのままずると安楽と快樂の地獄へ落ちていきそうだった。そこには己の人生はない。この甘美な日々が存在の意味はない。しかしその存在の意味は必要なものなのか。憂鬱な気分が次第に増してくるのだが、喉の奥には甘いものが滲み出て力なく流れる日々だった。

思えば、サンドラとの恋も自分の悪夢のような予感の中で、燃え上がりかけて、予感に負けて消えていったものだった。地中海の太陽と海の夢を垣間見たのは一瞬だった。かつて田

舎の郷里から東京へ出て新しい世界に自分を投げ打つていこうとした時も、いづれ自分はその予感するものに負けて、奈落へ落ちていくという事をすでに知っていたのだ。無意識のうちを知っていたのだ。

昔の日々と同じように何時間も森の中をさま迷った。堆積した落ち葉に足を取られながら歩いた。森の奥は薄闇に消えていた。時折り、飛び立つた鳥が木々に水滴を落とした。それを頬に受け彼は意識を取り戻した。自分の罪から永久に逃れられないのか。いや解放されることに意味はあるのか。今の甘美な日々に埋没していく事は無意味なのか、それは許されないのか、さらなる悪行なのか。

ある時は街の淫靡な暗闇に足を踏み入れ狂乱の時間を過ごした。酒は苦いだけだった。不潔な泥沼に身を晒せば、却って身が蘇る気がした。しかし結局は錆色の蜘蛛の巣のような痰を吐いただけだった。その胸を掻きむしる焦燥は自分のベッドで朝を迎えても消えなかった。屋敷の中でも外でも、この不道徳な己の無意味さを誰も咎めないのか。

朝の珈琲が終わると、散歩の前にフランス語の勉強をすることになった。父の死後それはしばらく途絶えていた。父の授業はモーパッサンやドレーデやサンテクジュベリーなど易しい小説の読書が主だった。Sがそれを続けようとする、晶子は、貴方の専門の好きなのにしなさいよ、と怒って言った。丁度いいと思って、ヴァレリーとマラルメを始めると、難し

いと言つてまた怒った。

それでヴェルレーヌとボードレルの分かりやすい詩を始める、毎回最後に声を出して感情をこめて読めと、要求した。Sは従った。続いて晶子も読んだ。

少し力がつくとSは再びヴァレリーを始めた。七十五歳の彼が三十七歳年下のジャンヌに恋をして妻を顧みずに行為と手紙と詩を捧げた詩集「コロナ コロニラ」は晶子も喜んだ。老いた詩人が性愛を語るの醜くまた美しかった。ジャンヌが他の男と結婚すると決めると彼は気落ちのあまり一か月も経たないうちに死んでしまう。文壇のインテリジェンスの象徴の恋の日々が、ナチスのパリ占領下だったことがさらに面白く、何度も繰り返し読んで読んだ。

ある夕食時中のことだった。ポケットに入れていた郵便物が気になってきた。「美神館」は長い間閉めていたので郵便物が時々転送されてきた。それもだんだん減っている近頃だった。日付を見ると随分経っていた。しかも長い間弟のように傍に居た後輩からだ。Sは理由を言うこともなく事務所を閉め彼との交流を断つたのだ。少し気にはなっていた。

ワインを飲みながら封を切ろうとすると、ナプキンがいきなり剥され皿やフォークや料理の残りが飛び散った。晶子は平然としていたが怒っていた。会社からなら、そんな会社なら早く潰しなさい、

静かな声だったが強い命令だった。

Sは怖れよりも何故か安心感を覚えた。会社を閉じてもいつでも再開はできる自信はあったので、管理人に金を送ってすべてを廃棄してもらった。残したい本などの未練はあったがもう面倒だった。しかしその後、急に会社の再開の興味は失せた。

「五」

父が亡くなり母が病気になつてから庭は荒れたままだったが、晶子は庭を再生させた。きれいに設計された庭ではなく、晶子の気ままな趣味の造園だったので庭師は言われたままの作業で満足だった。芝生を植え直し、紅葉の枝を揃え、季節ごとに切り取らねばならない萩や梅が剪定された。薔薇園を占領していた雑草は取り払われすぐに数百本の色とりどりの薔薇に埋められた。品種は何でも構わないということで、乱れた様はさらに華やかになった。

大広間のガラス戸を開けてスロープを辿るとそのまま芝生になる。その先に薔薇の群れが左右に広がっている。中に一本の枝垂れ梅が立っている。正面の奥は背景の山の景観を邪魔しないように低い東屋がある。周りの小さな草花畑の先は、コスモス畑から深い森に続いている。

庭の右奥には桜と紅葉の木々が混じって池を囲んで立つて

いる。季節にはライトアップされた桜や紅葉が池にその彩色された陰影を写す。根元を紫陽花と躑躅が隙間なく埋めている。鮮やかな原色の躑躅の満開時には萎れた桜の花びらがその上に降る。紫陽花は精一杯咲いても雨の奥から仄かな色をのぞかせるが、花の散つた後の形相は凄まじいほど陰惨だ。大きな野生の橡の木奥は山道に続いている。

左の奥の山側は白い大理石の砂利を敷き詰めた中に老松が立ち、周りを椿や山茶花や夾竹桃や辛夷が囲んでいる。春の花々は空へ向かつて伸びて咲くほど華やかだ。根元を萩の群生が荒んだ風情で埋めているが、夏の終わりに白い花が咲くと噴水のように噴き上げて乱れる。冬には山茶花の真紅が白い砂利の上に血飛沫のように散る。椿は首から、辛夷や夾竹桃の花は紙くずのように落ちて汚れて腐る。

庭の左の隅には長い間使われていないプールが、市内を一望しながら水色の空間を広げている。

四季ごとの婦人花見会が再開された。晶子の気まぐれの日時だった。料理と酒が東屋で振る舞われ、春と秋は着物での装いが決まっていた。ライトアップされた桜が水の底から深い味わいを見せると同時に、艶やかな着物が水面を浮遊した。コーラスと刺繍の仲間たちは同伴者を連れて来た。

秋は盛り上がりつつ崩れる白萩と池の中でさらに色づく紅葉の頃で、参加者は着物の柄には春とは違う沈んだ色を好んだ。冬は厚手を着こんで広間から雪を楽しんだ。酔い冷ましに

外へ出たものは、雪の積もった山茶花の枝葉から真つ赤な花が浮き出て綺麗だったと報告した。

初夏の満開の薔薇は爽やかな風に揺れて、まわりの薄い色の軽やかな洋装の女性たちとじゃれ合うようだった。晶子は薄紫色のワンピースを着こなし、車椅子にゆったりと座りながらも決して足は見せなかった。

我儘な晶子は誰にも相談せず気ままにやりたいことをやっていた。その通りになつても誰も傷つかなかつたし困らなかつたので嫌うものはいなかつた。例えばある年の初夏の薔薇鑑賞会に小さな出来事があったが、誰も気にしなかつた。

その年は特に天気にも恵まれ、同伴者も多かつた。子供たちは伸びやかな腕や足を柔らかな光線に晒して、明るい声をあたりに響かせていた。見知らぬ来客が次々に挨拶にきた。その中に上下の揃つたスーツを着こなし美容院帰りの髪型の婦人が一人いた。市長夫人で誰の同伴か分からない。

市内から山手へ街は伸びて住宅団地が広がつてきていた。S家の山林も高値であつたが、一部を手放すことになつてた。開発業者と昵懇の市長は計画の推進者だつた。

夫人は屋敷の古さと風格を褒め薔薇園を褒めた。そして言った。我が家にも、薔薇園がございますのよ、こんなに立派ではありませんが、主人は白薔薇が好きですので、それを中心にして植えております、今度一株お分けます、お持ちしましょう。

丁寧な口調だったがやはり市長夫人の言い回しだつた。確かに晶子の薔薇園には白薔薇は見当たらなかつた。あつたかもしれないが周りの華やかな原色に混じり初夏の光に煽られて燃え上がり空に消えていつたのだろう。

翌日晶子は庭師を呼び、広間から見える薔薇園の半分を根こそぎ持つていくように言つた。数日後、そこは二百あまりの牡丹の鉢に埋め尽くされた。濃い紫の大輪は見る者を恥じらわせるほど傲慢に揺れ、夜の闇でも炎のように揺れた。

市長夫人はそれを知つて知らなかつたか白薔薇をもつて来なかつた。コーラス仲間は散つた牡丹の花びらを楽譜に挟み、刺繍仲間はゆつくりと観察した。

早い夏が始まつた日だつた。一番古い友人が広間から空を見ながら、今年は暑くなりそうね、海にでも行きたいわ、昔ブルが・・・、と言いかけて慌ててやめた。この家のプールは一度みんなで遊んだが、たつた二週間で廃墟となつたのだつた。晶子が怪我をしてから使われたことはなかつた。友人は恥じるように晶子に目を向けたが、晶子は気にしなかつた。

もう二十年にもなるわね、と晶子は言つた。二十年は友人との付き合いかプールの事なのかはわからなかつた。彼女は数えていたのだ。いいわ、再開しましょう、とはつきりと言つた時、皆は驚いて喜んだ。お腹が出て、足が太つて水着は恥ずかしいなどと会話は弾んだ。だが晶子はどうするのだから



うとは誰も言えなかつた。

底にたまつた砂や枯れ枝葉を除去し清掃塗装と消毒、モーターの入れ替え整備でプールの再生まで二週間かかつた。

## 「六」

明日にプール開きを迎える前日、Sは一人で泳いだ。そこから灼熱の夏の空が、市内の建物や港のその先の海までを包んでいるのが一望できた。家政婦に車椅子を押させて晶子がプールの傍まで来た。Sは潜っていた頭を上げて、眼鏡をはずして手を振つた。晶子の白いTシャツが眩しかつた。

晶子が弱い足で立ち上がり、支えていた椅子を両手で発条のように使いプールに飛び込んだのは一瞬のことだつた。Sが慌てて沈んだ晶子の脇を抱きかかえた時、彼女は顔を水から浮かべて髪を振つて笑顔を見せた。そのままSの肩につかまっていた。Sの目の前に晶子の耳があつた。濡れた髪に絡んだ首筋が水滴で光つた。胸のふくらみが微かに手を滑つた。二人は歩いた。晶子の歩行は軽やかだつた。端まで歩くとは後は後ろに回り、両肩を掴み体をSの歩行に任せて浮かせていた。手が滑りそうになると首にしがみついていた。頬と唇がSの首に触れた。柔らかな腕が首と肩に絡み、二つの乳房がほんの少し触れてすぐに去つた。Sはそれだけで満足しなければならなかつた。

手を取つて向かい合いSは後ろ向きに歩いた。晶子の歩行

は軽やかに踊るようだつた。ジーンズの短パンを履いているのは最初から水に入るつもりだつたようだ。水を通してみる脚は細く白く揺らいでいた。

かつて見た絵の、新緑の森のせせらぎを蹴つて逃げてくる可憐な仔鹿がふと浮かんだ。狩人に狙われた怖れと自分の死の予感に打ち震えて駆けるその脚は、それ故にさらに美しくつた。

白熱していた穹窿が暗転した。

古くなつた空調のためSの部屋は蒸し暑かつた。やっと寝付こうとした真夜中に、呼びベルが鳴つた。初めての事だつた。具合が悪くなつたのかと慌ててシャツをはおり晶子の部屋へ向かつた。

冷房は適度にきいて、冷たい清新な香水が漂っていた。テールには紫大理石を薄く削りぬいたランプが淡い光を放っている。大きな美しい眼がSを闇の中に引きずり込もうとしているように見つめている。濃い紫の薄物を身に着けて体の半分を寝具から出している。

今日のプールで脚が冷えてしまった、暖めて頂戴と、晶子の命令だつた。Sは手を差し込んで脚を擦つた。確かに冷たく、その細さと頼りなさに胸が詰まつた。その脚の冷たさと儂さが自分の罪だと思ふと悲しみが沸き起こつて来て、それが愛おしさに変わっていくままに、頭をそこに埋めた。貴方の胸で暖めなさい、とはつきりした声でした。Sは両手で二

本の脚を抱いた。そして少し暖まった脚に唇をつけた。薄衣のほかに彼女は身になにもつけていなかった。唇は脚から下腹から胸から首へと柔らかな陰影を這いながら吸った。最後にいつも見詰めていた懐かしい唇を吸った。

「七」

それから三十年以上経ったが、ほかに記す特別なことはない。いくつかの出来事はあったが、日々は同じように繰り返されて流れ、二人は雲の中を歩くように漂っているだけだった。

無為なる日々、気を失うほどの倦怠の日々、それを平穏な時と呼ぶのか、退廃への墜落とのか誰にも分からない。しかしこれほど人を満足させる時間という美食は他にはない。ただその甘い時間は永遠に続かないが、そこに漂っている者にとつては、いずれ時間とともに消えていくであろう至福の生であり、甘美な葬儀への遊行である。

あるいは外界から遮断された中においての一つの確実な存在であると言えることには間違いない。

屋敷の外壁は蔦に覆われ秋には紅葉した。初夏には周囲の石壁に貼りついた濃い紫の藤の花が自然のまま垂れ下がった。壁はどこどころ崩落したがそのままだった。

用心のための番犬としてシェパードを飼ったが十年おきに死んで四頭目はやめた。名前はどれも母と同じにサトと呼ん

だ。初めは外に檻を作ったがそのうちに部屋に入れた。獣臭が次第に蓄積されたが誰も気がつかなかった。毎朝と夕方の一時間の散歩はSの楽しみだったが、それがなくなつてからSは急に老いた。

刺繍とコーラスの仲間は歳をふるごとに減つて一人になった。花見会はいつの間にか知らない老人老婆が参加して飲み食いするようになったのでやめた。

プールの使用は再開した年のみでまた廃墟になった。

庭は廃園になった。その中でも朝の車椅子の散歩は続けられた。手入れをしない花々は年毎に貧弱になっていつても季節ごとに咲いた。

家政婦は結婚して、同じように通つてきた。しかし慣れてくると掃除などが雑になって埃が随所に溜まったが、誰も気にしなかった。朝、前の晩の食卓を片付ける時、家政婦が料理の残りを持つて帰るため包むようになった。晶子はわざと多めに残した。

晶子の化粧は歳が老いるごとに濃くなった。瞳は深い紫色の湖のようだった。皺も増えたがSの愛おしさの思いは消えなかった。

フランス・ガリマール書店から念願のヴァレリーとマラルメの全集を買った。毎日Sはゆつくりとそれに向かった。

家政婦にインフルエンザをうつされて晶子は八十歳で死んだ。

Sに解放感はなく、虚脱感だけがあった。彼は毎晩晶子のベッドで寝た。経帷子のように体を束縛し、纏いつき締め付けるような晶子の幻影を求めた。その亡霊が彼を誘って奈落の闇に沈んでいく事を願った。しかし願いは叶わないばかりか、その失望感も次第に薄れていった。欲するものはなくなった。寂しくはあったがそれを感じる力は軽い綿のようなものに吸い込まれるようだった。何事にも興味はなく頭の隅が常に痺れて、鈍感になっていった。

別に生きながらえる意味と希望を持たなかったので、いつか使うだろうと思つて、随分前に晶子が言っていたトリカブトを庭に探した。

## 補 追

ただ私には一つだけはつきりわかったことがある。

USBに残されたヴァレリーとマラルメの翻訳が年ごとに意味不明になっていったのだ。同じ単語が並び、平易な形容詞が繰り返し読点もなかった。時折り、感極まったような文章があると、それがとめどなく続きしかも意味不明の詠嘆で終わる。

彼の頭の中に灰色の雲が沸き起こり、スポンジのように固まって彼の意識を占領していったのだろう。そして廃人になつたかもしれないが、安らかに死んだのならむしろ安心で

きる。

それで彼が不幸であつたとは思わない。

2022・11・9